

平成30年度 自己点検・評価報告書

鹿児島工業高等専門学校

はじめに

鹿児島工業高等専門学校は、平成 31 年 3 月 18 日(月)に外部評価委員会を開催しました。本報告書は、その審議と意見交換の概要、外部評価委員からの講評をまとめたものです。

本校は毎年、独立行政法人国立高等専門学校機構（高専機構）に年度計画とその実績報告を提出しています。今回の外部評価に当たっては、高専機構に提出した平成 30 年度の年度計画・実績を再整理し、自己評価を加え、外部評価委員会の資料としました。この資料を事前に委員の皆様へ送付して質問事項と指摘事項を提出していただき、それらを事項別に分類してそれぞれを学内担当者に渡し、学校としての回答をまとめました。

外部評価委員会には、鹿児島県教育委員会 教育委員の新原様(長岡技術科学大学前学長)に委員長に就任していただきました。委員会では、まず本校がスライドを用いて本校の概要と特色について説明しました。

その後、委員の皆様から事前にいただいた質問事項や指摘事項に学校側が答えるという形で進めました。

外部評価委員会では新原委員長に各委員の指摘内容を要約し、特に重要な点を大きく 3 点に絞って整理していただきました。ご指摘いただいた 3 点の講評を平成 31 年度の事業計画に盛り込み、業務改善に努めて参ります。

本報告書をご確認いただき、今後とも忌憚のないご意見やご批判を賜りますようお願い申し上げます。

鹿児島工業高等専門学校
校長 氷室 昭三

目 次

はじめに

第1部 平成30年度 自己点検・評価報告書

1 教育に関する事項

(1) 入学者の確保	7
(2) 教育課程の編成等	7
(3) 優れた教員の確保	9
(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム	9
(5) 学生支援・生活支援等	10
(6) 教育環境の整備・活用	11
2 研究や社会との連携に関する事項	12
3 国際交流等に関する事項	14
4 管理運営に関する事項	17

(資料1～7 18～29)

自己点検・評価報告書に対する外部評価委員からの

事前質問等と回答	32
----------	----

第2部 平成30年度 外部評価報告書

1. 平成30年度外部評価委員会委員名簿	46
2. 平成30年度外部評価委員会委員出席者名簿	47
3. 平成30年度外部評価委員会列席者名簿 (鹿児島高専)	48
4. 平成30年度鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会実施要領	49
5. 平成30年度外部評価委員会日程表	50
6. 鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則	51
7. 外部評価委員会議事録 (一部要約)	52
8. 外部評価委員会講評	83

第 1 部

平成 30 年度 自己点検・評価報告書

平成30年度 自己点検・評価報告書

大項目	評価項目
1 教育に関する事項	(1) 入学者の確保
	(2) 教育課程の編成等
	(3) 優れた教員の確保
	(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム
	(5) 学生支援・生活支援等
	(6) 教育環境の整備・活用
2 研究や社会連携に関する事項	(1) 科研費と外部資金
	(2) 教員の研究業績、知的財産
	(3) 地域連携
	(4) 鹿児島高専テクノクラブ(KTC)
3 国際交流等に関する事項	(1) 海外インターンシップの推進及び海外インターンシップ生の受入
	(2) 学生交流による海外派遣及び受入
	(3) 海外学術交流協定校との研究者交流
	(4) 英語力向上のための取組
	(5) 国際交流イベント及び会議への出席
4 管理運営に関する事項	(1) 校長裁量経費
	(2) 業務効率化(経費節減)
	(3) 研修、表彰、人事交流
	(4) 法令遵守やセキュリティに係る研修実施等

1 教育に関する事項

評価項目	計 画	平成30年度実績(実績は12月末時点) ※適宜、平成29年度までの実績を用いる	自己評価
1-(1) 入学者の確保	① ・メディアの活用について、地元新聞社との連携協力協定や、テレビ・ラジオ等を活用し、イベント開催等の情報を地域社会に向けて発信する。	①-1 ・本校開催イベント(学校説明会、一日体験入学、公開講座等)について、本校ホームページをはじめ、地元の新聞社(南日本新聞社)やテレビ局を活用し案内を行った。 ①-2 ・保護者向け校内合同企業セミナー(5月26日開催)や本校の産学官連携組織「鹿児島高専テクノクラブ」(KTC)創立20周年記念式典(9月7日開催)について南日本新聞社及び鹿児島ケーブルテレビから取材があり、記事が掲載された。金融機関の私募債制度を活用した地元企業からの物品贈呈式(7月31日)について南日本新聞社の取材を受け、記事が掲載された。 ①-3 ・本校の情報を地域に向け発信するツールの1つであるJR隼人駅の「本校掲示スペース」に校名及び校章を入れたアクリルプレートを設置した。また掲示物の破れ・汚れ防止のため、A1サイズのフレームを整備した。	A
	② ・一日体験入学、学校説明会について、内容の充実を図るとともに、積極的にPR活動を行っていく。	②-1【資料1】 ・一日体験入学には、県内外から中学生448名、保護者360名、合計808名の参加があった。 各学科2班に分かれ、各学科の体験実習や学科展示・学科説明、学校概要等の説明を行い、本校の幅広い紹介を行った。 新たな取り組みとして、希望者を対象とした、学寮と図書館の施設見学会(寮生による学寮説明会)を行った。 また、個別に進学相談、部活動紹介、Robogals鹿児島のワークショップ、女子学生と女子中学生の交流会を開催した。 ②-2【資料1】、【資料2】、【資料3】 ・中学生と保護者を対象とした学校説明会を鹿児島市、霧島市、鹿屋市にて開催し(10月:4回)、中学生115名、保護者168名の参加があった。 ・中学校教員向け説明会(6月:2回)、塾講師向け説明会(6月:2回)では、中学校教員54名、塾講師24名の参加があった。 ・主に夏季休業期間中に実施していた「公開講座」を、夏季と冬季に実施することで、開講テーマの充実を図った。 ・学校紹介データ(パワーポイント、パンフレット)について、説明会等での質問事項や最新情報を盛り込むことで、中学生及び保護者がより理解しやすい構成へ改訂した。	A
	③ ・女子生徒へのPR活動について、「Robogals鹿児島」を活用し、小・中学校の女子生徒を対象としたワークショップを開催する。	③ ・各種イベントにてRobogals鹿児島による「ワークショップ」を開催し、本校女子学生と女子小・中学生との交流の機会を設けた。 一日体験入学(8月5日)では、Robogals鹿児島が女子中学生を対象として「ロボットの実演」や「操作体験学習から成るワークショップ」を行った。また、高専文化祭(10月27日)、霧島市教育委員会メディア・センターまつり(11月11日)にて、「ワークショップ」を行った。	A
1-(2) 教育課程の編成等	① ・MCC(モデルコアカリキュラム)について、MCC本案とカリキュラム対応の確認を行いつつ、質の保証を目指す取組を注力する。	① ・MCC対応について、カリキュラムの変更内容を教務委員会で検討したが、平成30年度入学生のMCC対応は、一部条件付きの移行である。そのため、年次進行とともにカリキュラム内容を変更し、完全対応へ移行していく。	A'
	② ・学科改組について、平成32年度改組を目指し、高専機構と相談しながら準備を進めていく。提出資料については、平成31年4月下旬までに高専機構を通じて文科省へ提出する。	② ・学科改組の事前相談資料を高専機構へ提出した(9月26日)が、協議の結果、地域のニーズ等の関連も含め再検討することとなった。 海外4大学等との連携教育プログラムは実施しており、また、学内教員での研究グループを編成し、現在、改組について検討中である。	B

<p>③</p> <p>・CBT試験の活用について、平成29年度CBTトライアル試験と本校の定期試験、課題試験等の相関分析を行う。</p> <p>※CBT:紙を使わずコンピューターで受験する方式のテスト</p>	<p>③-1</p> <p>・平成29年度CBT試験の学生個人成績表と定期試験や課題試験との相関分析を行った結果、相関関係があることを確認した。(教務主事・数学教員)</p> <p>③-2</p> <p>・平成30年度CBT試験は、11月から12月にかけてPC室を利用して実施した。 (数学:1年生、2年生、3年生) (物理:2年生、3年生) (化学:2年生)</p> <p>・CBT試験結果を踏まえ、MCCに即した目標を達成させ教育改善へ繋げていく。</p>	A
<p>④</p> <p>・授業評価アンケートについて、Moodleを用いてアンケートを実施し、その結果を各教員にフィードバックする。また、教育改善へつなげられる内容の改善やデータの蓄積を図る。</p> <p>※Moodle:eラーニングプラットフォームのこと</p>	<p>④</p> <p>・前期末試験期間、答案返却期間を利用し、Moodleを用いた授業評価アンケートを実施した。その後、授業評価担当教員による教育改善を踏まえた分析を行い、授業評価アンケート結果を各教員へ通知した。また、教務委員会へのアンケート結果を報告し、分析を行った。</p>	A
<p>⑤</p> <p>・授業力アップアクティビティについて、アクティブラーニング等の研修やFD活動を実施する。また、得られた成果や課題を学内全体で活用できる仕組みを構築する。</p>	<p>⑤</p> <p>・授業力アップアクティビティを10月から1月にかけて実施し、2月～3月にかけて、改善点について教務委員会、FD委員会等にて検討を行っていく。</p>	A
<p>⑥</p> <p>・特別研究について、専攻科1年生対象に「プロポーザルディフェンス」を実施し、研究内容の充実を図る。</p> <p>※プロポーザルディフェンス:どのような研究をしようとしているのか説明し、認めてもらうこと</p>	<p>⑥</p> <p>・特別研究 I の研究計画報告会を開催し(8月8日(水))、ショートプレゼンテーションやポスター発表を行った。(専攻科1年生:26名、教職員:18名、本科生:12名が参加した。)</p>	A
<p>⑦</p> <p>・インターンシップについて、海外インターンシップ(専攻科)の充実を図る。</p>	<p>⑦【資料4】</p> <p>・専攻科生が参加した海外インターンシップは以下のとおりである。また、企業・大学の開拓を行い、参加可能な企業等は増え、学生の選択肢が広がった。</p> <p>1)MK Waterteckインターンシップ(タイ(H30.8.20-9.14)):1名)</p> <p>2)Jurong Engineering Limited(シンガポール(H30.9.1-9.20)):2名)</p> <p>3)KU(カセサート大学)とのインターンシップ(タイ(H30.8.20-9.14)):1名)</p> <p>4)マレーシア工科大学(UTM)研究室インターンシップ(マレーシア(H30.9.25-9.7)):2名))</p>	A
<p>⑧-1</p> <p>・学生を高専体育大会、全国高専ロボコン、全国高専プロコン、全国高専英語プレコン、全国高専デザコン等の大会に積極的に参加させる。</p> <p>⑧-2</p> <p>・学生を高専機構が主催するワークショップや学生教育プログラムに積極的に参加させる。</p> <p>⑧-3</p> <p>・後援会との連携を強化し、課外活動や学生の研修及び学会参加に対する支援を行う。</p> <p>⑧-4</p> <p>・全国高専体育大会バドミントン競技及び全国高専弓道大会の開催担当校として、大会運営を滞りなく行う。</p>	<p>⑧-1</p> <p>・九州沖縄地区高専体育大会に13クラブが参加し、うち6クラブが全国高専体育大会に参加した。また、弓道部も九州沖縄地区弓道大会及び全国高専弓道大会に参加した。この他、高専連合会が主催する大会(高専ロボコン九州沖縄地区大会、全国高専プロコン、全国高専英語プレコン、全国高専デザコン)や全国高専将棋大会やHondaエコマイレージチャレンジ全国大会、かぎん未来創造プランコンテスト等、文化系の大会・コンテストへも参加した。 【選手参加概況(高専連合会関連大会)】 九州沖縄地区及び全国高専体育大会…322名 ロボコン等文化系大会・コンテスト…28名</p> <p>⑧-2</p> <p>・平成30年度全国高等専門学校体育大会ポスターのデザインに都市環境デザイン工学科4年生の作品が選ばれた。</p> <p>⑧-3</p> <p>・後援会から、各種大会やコンテスト、学会等へ参加した学生の参加費や旅費に対する補助、引率教職員の旅費補助、外部指導者の謝金に対する補助を受け、課外活動や学生の学会参加に対する支援を行っている。</p> <p>⑧-4</p> <p>・大会担当校として、8月24日～26日にかけて、全国高専体育大会バドミントン競技を、また、8月29日～30日にかけて、全国高専弓道大会を開催し、事故等無く終了した。</p>	A

	<p>⑨-1 ・学生と教職員が共に取り組む美化活動を企画・実施する。</p> <p>⑨-2 ・クラブや学生団体による各種ボランティア活動を推進する。</p>	<p>⑨-1 ・5月7日から6月30日にかけて、学生会のメンバー(20~30名)が教職員の指導の下、構内の花壇の整備・水やりを行った。また、10月17日に、高専祭の準備の一環として、全学生・全教職員で校内一斉清掃を行った。</p> <p>⑨-2 ・西日本集中豪雨の発生を受け、学生会が学生・教職員を対象に募金活動を行い、募金額36,231円を日本赤十字社を通じて被災地に届けた。</p>	A
1-(3) 優れた教員の確保	<p>① 教員の新規採用に公募制を導入し、多様な背景を持つ教員の採用を行う。</p>	<p>① ・情報工学科1名、都市環境デザイン工学科教員2名の新規採用において公募制による採用活動を行い、選考委員会を開催したが採用には至らなかった。今後も原則として公募制を適用する。</p>	A'
	<p>② ・55歳以下の教員に対し人事交流・研修等に関する教員アンケートを実施し、「高専・技科大間教員交流制度」、「九州沖縄地区高専間教員交流」、内地研究員、在外研究員等に関して、計画・要望を考慮した派遣に取り組む。</p> <p>※内地研究員:大学等の教員が所属場所を一定期間離れて国内の大学等で研究に専念させる制度 在外研究員:大学等の教員が所属場所を一定期間離れて海外の大学等で研究に専念させる制度</p>	<p>② ・人事交流・研修等に関する教員アンケートを実施し、計画・要望等を考慮した申請手続きを行い、在外研究員として1名採択された。</p>	A
	<p>③ ・教員公募の際には、博士の学位取得者もしくは取得見込みの者や技術士等の高度な資格を有する者等の条件を付し、優れた教育力を有する教員を採用し、専門科目にあつては、博士の学位や高度な資格を持つ者70%以上、理系以外の一般教育科にあつては、修士以上の学位や優れた教育力を有する者80%以上を維持する。</p>	<p>③ ・博士の学位取得者あるいは取得見込みの者との条件を付し採用活動を行い、選考委員会を開催したが、採用には至らなかった。今後も優れた教育力を有する教員の採用を目指し採用活動を行う。 【本校の現状】 専門科目:博士の学位や高度な資格を持つ者93% 一般教育科:修士以上の学位や優れた教育力を有する者90%</p>	A
	<p>④-1 ・教員公募の際には、女性教員の採用を積極的に行う文面を要領に記載し、女性教員の積極的な採用を推進する。</p> <p>④-2 ・女性教員の比率増加に向け、女性用の更衣室、休憩室、トイレ等の整備を進めていく。</p>	<p>④-1 ・公募要領に女性限定公募及び女性教員を優先的に採用する旨の文面を記載し、採用活動を行った。今後も女性教員の積極的な採用活動を推進する。</p> <p>④-2 ・女子寄宿舎における便器取替工事(和から洋に2台)が9月27日に竣工した。今後の図書館等の改修においても、女性教員の意見を広く反映した施設整備を実施する。</p>	A
	<p>⑤ ・高専機構本部や地元教育委員会等が実施する研修やFDセミナー等への教員の派遣を行う。</p>	<p>⑤ ・生徒指導実践力向上プログラム(鹿児島県総合教育センター主催、1名参加) ・心の問題と成長支援ワークショップ(日本学生支援機構主催、1名参加) ・聴覚障害教育研究(鹿児島県立鹿児島聾学校主催、1名参加) ・障害学生支援理解・啓発セミナー(日本学生支援機構主催、1名参加)</p>	A
1-(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム	<p>① ・FDについて、教員相互による授業参観を実施し「授業力アップアクティビティ」として積極的に取り組んでいく。また、学内FD研修会を年2回程度実施する。</p>	<p>①-1 ・教員相互の授業参観を実施し、教務委員会、教職員集会で情報共有を行った。今後、実施方法や改善点について、検討していく。</p> <p>①-2 ・第1回FD研修会では、「モデルコアカリキュラム(MCC)」と「授業力アクティビティについて」を実施し、講師3名が講演を行った。(開催:6月4日) 第2回FD研修会では、「普段授業を行う上で考えていること、実践していること」、「Moodeの活用とアクティブラーニング」を開催し、講師2名が講演を行った。(開催:11月30日)</p>	A

<p>② ・インターンシップ参加者を増やすために、参加指導を行っていくとともに、地元企業のインターンシップ受入れ先をさらに開拓していく。</p>	<p>②【資料4】 ・夏季休業前にインターンシップの参加指導(事前講習会等)を行った。平成30年度のインターンシップ参加者数は、本科4年生177名(86%)、専攻科生12名(44%)で、総参加者数は前年比20.3%増(32件増)となった。なお、県内企業等へ34名(19事業所)が参加し、このうち鹿児島高専テクノクラブ企業へ18名(5事業所)が参加した。 地元企業の人事担当者が求人訪問等で来校された際、インターンシップ受入を依頼し、受入企業の開拓を行った。</p>	A
<p>③ ・技術士会との共同教育について、鹿児島県技術士会との協定に基づき、技術士との共同教育を継続して実施する。</p>	<p>③ ・鹿児島県技術士会から講師を招き、共同教育として以下の特別講義を実施した。 1)本科5年生を対象に「技術倫理総論(特別講義)」を実施した。(6月から7月実施) 2)本科2年生を対象に「キャリア教育(特別講義)」を実施した。(11月実施) 3)専攻科1年生を対象に「環境創造工学特別講義(特別講義)」を実施した。(10月から12月実施) 4)専攻科2年生を対象に「技術倫理(特別講義)」を実施する。(11月から1月実施)</p>	A
<p>1-(5) 学生支援・生活支援等</p> <p>① ・学生のメンタルヘルスケア、ならびに学習・発達障害等に対する特別支援を要する学生の把握と内外の関係各所と連携した取組を推進する。</p>	<p>①-1 ・近隣の医療機関と連携し、従来のカウンセラーによるカウンセリングに加え、9月と3月を除き、毎月第1・第3木曜日に臨床心理士によるカウンセリングの時間(3時間)を設けた。</p> <p>①-2 ・4月に「心理検査Hyper-QU」及び「こころと体の健康調査」、10月に「学校適応感尺度調査」を実施し、支援を要する学生の早期把握に努めた。この他、1年生と留学生を対象として、「YG性格検査」を実施し、その結果に基づき、新入生カウンセリングを行った。</p> <p>①-3 ・学生のメンタルケアや特別支援を要する学生の把握と関係各所との連携を迅速・強化させるため、これまで学生主事が統括していた学生何でも相談室長を校長が任命し、10月以降の校務連絡会で、支援を要する学生等の状況について学生何でも相談室長が報告を行う体制に変更した。</p>	A
<p>②-1 ・教職員に対し、高専機構主催及びその他のメンタルヘルス講習会への参加を周知する。</p> <p>・九州沖縄地区高専学生相談室長連絡協議会に参加する。</p> <p>・研修会・講習会等で得られた学生支援に関する情報の内、他教職員との共有が望ましいものについては、学内で回覧する。</p> <p>②-2 学生委員会において、学生に対する就学支援・生活支援を推進する。</p>	<p>②-1 ・教職員に高専機構主催及びその他のメンタルヘルス講習会の案内を行った。このうち、平成30年度「児童生徒の自殺予防に関する普及啓発協議会」(文部科学省主催)に学生何でも相談室長が参加した。</p> <p>・6月7～8日開催の「九州沖縄地区高専学生相談室連絡協議会」に学生何でも相談室長及び保健室看護師各1名が参加した。また、9月13～14日開催の「第15回全国国立高等専門学校学生支援担当教職員研修」に学生主事補、学生なんでも相談室長、保健室看護師各1名が参加した。今後、共有が望ましい情報を整理し、学内で回覧する予定である。</p> <p>②-2 ・学生委員会において、日本学生支援機構や県育英財団を始めとする各種奨学金、国による就学支援金、入学料・授業料免除等の推薦候補者の選考を行い、経済的支援を推進している。</p>	A'

<p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生や保護者に対し、本校HPを通じ、各種奨学金制度について情報提供を行う。 ・日本学生支援機構の給付型奨学金について周知し、要件を満たす学生を推薦する。 ・奨学金の返済遅延を生じないよう、学生に対し、十分なガイダンスを行う。 	<p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生や保護者に、本校HPを通じ、日本学生支援機構を始めとする各種奨学金や国による就学支援金、授業料免除等に関する情報を提供した。 ・日本学生支援機構の給付型奨学金制度について掲示板やHP等により学生に周知し、応募があった25名のうち、要件を満たす1名の推薦を行った。 ・日本学生支援機構奨学金の返還に関する説明会を10月12日に実施した。また、3月6日の合格者登校日に、日本学生支援機構からスカラシップ・アドバイザーを招き、奨学金制度の概要や資金計画に係るガイダンスを新入生の保護者に対して行っていただく予定であり、招聘の準備を進めている。 	A	
<p>④-1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校の合同企業セミナーを1月に開催する。個別の企業セミナーを積極的に開催する。また、学外において開催される高専生向け合同企業説明会へ学生を積極的に参加させる。 ・各学科の担任及び学科長と連携し、学生の適性や希望に応じることのできる就職支援体制を構築する。 ・学外の専門家による進路実務セミナーを開催する。 <p>④-2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就職問題懇談会「採用選考活動に関する申合せ」に則った就職支援体制を保持する。 	<p>④-1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生が自らの就職やキャリア構築について考える機会を与えるために、本科4年生及び専攻科1年生を対象とし、合同企業セミナーを1月12日に開催予定である。また、各界の企業による個別のセミナーも学生の空き時間や放課後を活用し、随時開催予定である。併せて、学外で開催される合同企業説明会について積極的に案内を行い、参加を促している。 ・9月下旬に各学科の担任及び学科長と協議を行い、平成30年度の就職支援体制(求人面談の実施手順や合同企業説明会の開催形態等)を決定した。 ・1月～2月にかけて、学生の就職活動支援の為、学外専門家による進路実務セミナーを実施予定である。 <p>④-2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就職問題懇談会の「採用選考活動に関する申合せ」に則り、就職活動の開始時期を設定し、業界研究を目的とした企業研究会の開催等、就職支援を行っている。 	A	
<p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在男子寮である第一志学寮の女子寮改修を計画している。改修後は女子寮の寮室不足を解消するとともに、リフレッシュラウンジ等を充実させ、魅力ある寮生活をアピールすることで、女子学生等の受入れを推進し、入学志願者の質を維持する。 	<p>⑤【資料5】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・男子寮の一つ(第一志学寮)を女子寮への転用を目的とした全面改修工事計画が平成31年度概算要求事業として採択され、定員100名程度の女子寮としてリニューアルされることとなった。今後、リフレッシュラウンジ等の共有スペースをはじめ改修工事の詳細について引き続き検討する。 ・更に、改修後は魅力ある女子寮を広く情報発信し入学志願者の確保に繋げる。 	A	
<p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生及び教職員へ「実験実習安全必携」を配付し、実習工場等の安全講習会を定期的実施するとともに、新規設備等の導入に合わせ適宜開催する。 	<p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成30年度の「実験実習安全必携」は配付されないが、実習工場において安全講習会を年度初めに開催した。年度末にも安全講習会を開催予定であり、新規設備等導入の際は、当該設備に合わせた講習会を開催予定である。 	A	
1-(6) 教育環境の整備・活用	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・機構本部から発信される男女共同参画に関する情報を教職員へ通知する。 	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・機構本部等から発信される男女共同参画に関する情報を教職員へオフィス掲示板により周知した。 ・機構本部等からの依頼により、管理職を対象とした平成30年度男女共同参画推進意識啓発講演会を、1月11日に実施(9名参加)した。 	A

<自己評価の標語> S:目標以上に達成している A:達成している A':概ね達成している B:一部達成している C:達成していない

2 研究や社会連携に関する事項

評価項目	計画	平成30年度実績(実績は12月末時点) ※適宜、平成29年度までの実績を用いる	自己評価
2-(1) 科研費と外部資金	① ・大型研究費を獲得した大学教員による外部資金獲得に向けた講演会の開催及び高専機構主催の外部資金獲得に向けたガイダンスに参加し、外部資金への応募・採択件数の増加を目指す。	①【資料6-①】 ・平成30年度の科学研究費助成事業の採択は4件(平成29年度から8件減少)であり、継続分(9件)と合わせると13件となった。 ・9月10日(月)～14日(金)研究力向上と科研費獲得のための研究発表会を開催し、本校教員5名と第5ブロック教員6名(11日以降はテレビ会議)が研究発表を行った。発表者の研究分野に対応した大型補助金獲得実績のある大学等の教員15名が、発表者の研究分野に対応したアドバイスをを行った。 ・平成31年度教員の科研費応募数(平成30年11月締切)は53件であり、昨年度(50件)を上回った。 ・9月11日(火)に大型研究費獲得実績のある大学等教員(2名)による科研費獲得のための講演会(52名参加)を実施した。 ＜次年度へ向けて その他＞ 科研費の継続課題のうち平成31年度に研究終了となる課題が5件あることから、平成32年度の科研費応募時には、二桁の採択数を目指し研究力向上に繋がる取組を継続して行う。また、必須としている全教員応募は達成できなかった。今後は、研究費配分等のインセンティブ等の再検討に加え、研究課題の設定が難しい教員への支援を検討し、全教員応募を目指す。	A'
	② ・外部資金(科学研究費助成事業、共同研究、受託研究、受託試験、奨学寄付金等)の受け入れ総額が昨年度以上となるように取り組む。	② ・平成30年度外部資金総額 94,376千円 (H30年12月末現在) ・平成29年度外部資金総額106,726千円 (H29年度実績) 平成30年度は、科研費の採択減はあったものの、大型プロジェクト(国交省)は継続して採択となったため、昨年度実績と同等となる見込である。総額が前年度以上となるよう引き続き外部資金獲得を目指す。	A'
2-(2) 教員の研究業績、知的財産	① ・研究成果発信のため、リサーチマップの教員研究業績データを更新する。 ※科学技術振興機構(JST)が運営する「リサーチマップ」は、26万人以上の研究者情報を有する国内最大級の研究者データベースである。	① ・平成29年度からは「リサーチマップ」で教員の研究業績管理を行うこととなり、平成30年4月までに全教員の登録が終わり、今年度は最新データへの更新手続きを行った。 ・11月30日にBISTRO下水道in霧島・鹿児島高専3rdを開催し、国土交通省の下水道応用研究(委託研究)の研究成果を地域に発信した。	A
	② ・技術移転が可能な研究成果や発明等を特許に結びつけられるよう、機構の知財コーディネーター等と連携し、取り組む。 ・機構承継保有特許(9件)の技術移転を促進する。 ・地域共同テクノセンター業務を担当する教職員を知的財産に関する講習会に参加させるとともに、学内での情報共有を図る。	② ・今年度は技術移転が可能な研究成果や発明等はなかった。引き続き、機構の知財コーディネーター等と連携し、技術移転可能な研究成果等の発掘に取り組む予定である。 ・機構承継保有特許(9件)の技術移転を促進させる方策は、今後の検討課題である。 ・地域共同テクノセンター業務を担当する教職員は知的財産に関する講習会に参加できなかったが、技術倫理を担当している教員が「知的財産制度説明会」に参加した。また、説明会資料をオフィス掲示板にアップロードし、情報共有を図った。	B

2-(3) 地域連携	① ・COC+の取り組みとして、鹿児島高専テクノクラブ(KTC)や地域企業の経営者・技術者等による特別講義を実施する。	① ・COC+の取り組みと連携し、KTC会員企業の協力を得て、6月から8月にかけて4年生5学科を対象とした企業技術者の特別講義を実施した。また、11月から12月にかけて、本科1年生5学科を対象とした企業技術者の特別講義を行った。さらに、11月から2月にかけて、3年生5学科を対象とした工場見学を実施している。(12月末現在:C科を除く4学科で実施済み)	A
	② ・本校学生及び保護者に対し、地域企業への理解を深めるための地域企業研究会やセミナーを実施する。	② ・5月26日に学生及び保護者向けの校内合同企業セミナーを、保護者懇談会に合わせ実施した。KTC企業22社、保護者82名、学生15名が参加した。 ・11月7日に本校体育館において、霧島市主催、鹿児島高専共催による大学等合同企業研究会を開催し、学生195名が参加した。(参加企業等31社) ・1月23日に本校体育館に於いて、KTC会員企業による4年生及び専攻科1年生を対象とした、平成30年度「高専生のための地域企業研究会」を開催予定である。(参加予定企業36社)	A
2-(4) 鹿児島高専テクノクラブ(KTC)	① ・本校との産学官連携組織であるKTCと連携し、技術研修会等において、本校シーズと企業のニーズをマッチングする企画を行い、共同研究への推進を図る。	① ・9月7日に開催した「KTC20周年記念式典」(183名参加)において、多くの会員企業等(一般・特別会員97名参加)が参加し、本校教員との交流を図った。今後の共同研究推進に向けての機会となった。 ・KTCと連携し、3月開催の第3回技術研修会で本校教員のラボツアーを行い、教員と企業との連携や本校シーズと企業のニーズのマッチングを図る予定である。 ・企業との共同研究は8件(12月末現在)あり、うちKTC企業との共同研究は4件である。	A
	② ・KTC会員企業100社を目指し会員獲得増加に取り組み、平成30年度中90社を目標とする。	②【資料6-②】 ・教員との面談時に学生課前に設置してある、KTC会員企業銘板をきっかけとして申込を行う企業が増えてきた一方、これまでKTCの活動に参加していない企業からの退会の申出が増えてきている。平成30年度の入会7社、退会6社で12月末現在87社である。 ＜次年度へ向けて その他＞ 多くの企業が参加できるような魅力ある取組を検討することが今後の課題である。	B

<自己評価の標語> S:目標以上に達成している A:達成している A':概ね達成している B:一部達成している C:達成していない

3 国際交流等に関する事項

評価項目	計 画	平成30年度実績(実績は12月末時点) ※適宜、平成29年度までの実績を用いる	自己評価
3-(1) 海外インターン シップの推進及 び海外インターン シップ生の受入	① ・海外学術交流協定校等とのインターンシップ学生の派遣及び受入を推進する。	①【資料7-表2】 ・海外学術交流協定校1校から1名のインターンシップ生を受け入れ、4校に計5名をインターンシップ生として派遣した。また、鹿児島県の企業の協力によりフランスから1名のインターンシップ学生を受け入れ、2企業に3名の学生を派遣した。 ・海外大学でのインターンシッププログラム新規開拓に引き続き注力し、新たに2校本校学生の受入先が開拓された。	A
	② ・日系企業等の協力を得ながら、海外インターンシップを推進する。	②【資料7-表2】 ・企業からの寄付により、シンガポールでの海外インターンシップを実施し、2名の学生が参加した。	A'
	③ ・学生の参加を推進するための補助を検討するとともに、現行の海外インターンシップを安全に充分配慮して実施する。	③ ・海外インターンシップに係る学生の渡航費の一部を本校国際交流基金から補助するよう体制を整えた。要件を満たした学生に渡航費の半額程度の補助を支給している。 ・海外インターンシップ参加学生には全員、有事の際に日本語で24時間サポートを受けられるアシスタンスサービスに加入することを義務付けている。参加学生のうち2名は外務省海外安全ホームページで危険レベル1に設定されているタイへのインターンシップだったが、現地での安全対策について事前学習を行った上で渡航し、無事に帰国した。	A
3-(2) 学生交流による 海外派遣及び受入	① ・海外異文化研修及び海外語学研修を実施する。	①【資料7-表3】 ・9種類の海外研修プログラムに、本校から計37名の学生が参加した。	A
	② ・海外教育機関からの外国人留学生受入を継続する。	②【資料7-表3】 ・海外教育機関3校から計27名の学生を受け入れた。 ・外国人学生受入プログラムでは、優秀なアジア地域の青少年を日本に招へいし、アジア地域と日本の科学技術に貢献することを目的としている「さくらサイエンスプラン」への申請等で、外国人学生の金銭的負担を軽減することができた。平成30年度は3件のうち2件が採択され、受入が実現した。昨年度の反省を生かして学生交流の機会を多く取り入れることで、採択率が向上した。(平成29年度:2件申請のうち1件採択)	A

	<p>③ ・各種申請や補助金を利用して、今後も学生の海外派遣を継続する体制を構築する。</p>	<p>③ ・本年度実施した語学研修プログラムについて、文部科学省の「国際文化交流促進費(高校生国際交流促進費)」補助金を申請し、採択された。</p> <p>・2019年度実施予定の海外研修プログラムについて、日本学生支援機構の「海外留学支援制度(協定派遣)」に1件申請し、採択された。</p> <p>・学生2名が、2019年度の留学計画を「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム【高校生コース】」に応募した。</p> <p>・その他の海外研修プログラムについて、学生の渡航費の一部を本校後援会から補助することとなった。</p>	A
3-(3) 海外学術交流協定校との研究者交流	<p>① ・教員の海外学術交流協定校への派遣を積極的に推奨する。</p>	<p>①【資料7-表4】 ・海外学術交流協定校2校及び新規開拓中の教育機関3校を教員計9名が訪問し、新規交流プログラム実施及び学術交流協定等についての協議を行った。</p> <p>・学生交流や海外インターンシップ引率の機会を活用して海外学術交流協定校等を訪問し、今後の交流についての打合せを行った。</p>	A
	<p>② ・海外教育機関から教員を招へいする。</p>	<p>②【資料7-表4】 ・6つの教育機関から計13名の教員を受け入れた。</p>	A
3-(4) 英語力向上のための取組	<p>① ・学生向け英語コミュニケーション能力向上のための取組を実施する。</p>	<p>① ・グローバル高専事業にて、本年度は下記のプログラムを実施した。</p> <p>7月：外部講師を招いて本科5年と専攻科生、教員を対象に「英語論文書き方セミナー」を実施した。(学生26名、教員4名参加)</p> <p>7月：スウェーデン人講師を招へいし、学生19名、地域企業関係者6名、地域中学生10名を対象に「VRに関するワークショップ」を英語で開催した。</p> <p>10月：本校学生と地域の中学生を対象に、外国人講師と英語のみでコミュニケーションを取り課題に取り組む「English Camp in Kagoshima Kosen」を実施した。(学生69名、中学生10名参加)</p> <p>10月～2019年1月：外部講師を招いて本校学生を対象に「TOEICスコアアップ講座」を実施した。(学生50名参加)</p> <p>12月：外部講師を招いて本科5年と専攻科生、教員を対象に「英語プレゼンテーションセミナー」を実施した。(学生14名、教員2名参加)</p> <p>3月：マレーシアにてペトロナス工科大学と第5ブロック高専で連携して国際シンポジウム「ISIE2019」を開催する。本校からは、学生3名と教員3名が参加予定である。</p>	A
	<p>② ・教職員向け英語コミュニケーション能力向上のための取組を実施する。</p>	<p>② ・グローバル高専事業の一環で、10月～12月に「教職員向けオンライン英会話講座」を実施した。昨年度の反省を踏まえ、受講者の英語力向上を定量的に確認するためにレベルチェックテストの受講を義務付けた。(教員9名、職員4名参加) テストの結果については、現在収集中である。</p>	A'

<p>3-(5) 国際交流イベント及び会議への出席</p>	<p>① ・日本文化勉強会、九州沖縄地区留学生交流研修会、九州地区の工場見学、各種の地域国際交流イベントへ留学生を参加させる。</p>	<p>① ・平成30年9月、「霧島市国際交流協会設立10周年記念国際親善レガッタ大会」に留学生1名と教員1名が参加した。 ・平成30年10月、九州沖縄地区留学生交流研修会に、本校から留学生3名が参加した。 ・平成30年11月、霧島ふるさと祭り国際交流ブースにて留学生5名が出身国の紹介ポスターを展示した。 ・平成30年12月、霧島市国際交流協会主催の「国際交流の集い～世界の味ランチ～」に留学生1名が参加した。</p>	<p>A</p>
	<p>② ・国際シンポジウムに参加する。</p>	<p>② ・平成30年5月、福岡市にて行われた「高専アイデアソン」に学生3名が参加し、海外の学生とアイデアを出し合い、英語での発表を行った。 ・平成30年8月、マレーシアにて国際シンポジウム「SEPKA-ISEED 2018」が開催され、学生2名が参加し、英語で発表を行った。 ・平成30年11月福岡市にて行われた「高専ハッカソン」に学生4名が参加し、海外の学生とアイデアを出し合い、発表等を行った。 ・平成30年12月、国内の3大学・3高専と韓国の2大学による国際シンポジウム「IJSEE2018」が韓国にて開催され、学生12名が参加し、英語で口頭発表を行った。 ・2019年3月、九州沖縄地区高専とマレーシアのペトロナス工科大学が協働して実施する国際シンポジウム「ISIE2019」をマレーシアにて開催する。本校からは3名の学生が参加し、発表を行う。</p>	<p>A</p>
	<p>③ ・県内外の各種国際交流関連会議及び各種国際フォーラムに出席し、情報収集を行う。</p>	<p>③ ・平成30年7月、「平成30年度全国国立高等専門学校 国際交流室・国際交流センター長会議」に教員1名が参加し、全国高専間で情報収集を行った。会議資料を国際交流委員会委員へ回覧することで情報共有を図った。 ・平成30年12月、「平成30年度国際交流関係教職員スキルアップワークショップ」に教員2名が参加し、全国高専間で情報収集を行った。会議資料を国際交流委員会委員へ回覧することで情報共有を図った。 ・平成31年2月、宇部高専主催の「国際化の加速・推進」シンポジウムに、教員2名が参加し、今後の国際交流のための情報収集を行った。</p>	<p>A</p>

<自己評価の標語> S:目標以上に達成している A:達成している A':概ね達成している B:一部達成している C:達成していない

4 管理運営に関する事項

評価項目	計画	平成30年度実績(実績は12月末時点) ※適宜、平成29年度までの実績を用いる	自己評価
4-(1) 校長裁量経費	① ・校長裁量経費を確保し、その一部を公募型にし、また外部資金獲得推進のため、外部資金獲得者については校長裁量経費から研究費を追加配分することで、教職員の積極的な教育研究活動を後押しする。	① ・公募型 平成30年度 応募件数41件、採択件数40件 (学会発表32件(国内15件、海外17件)、論文掲載料4件、新任教員支援2件、学会参加費2件) ・外部資金獲得 平成30年度科学研究費新規採択者及び、A判定獲得者(4名)に校長裁量経費から5万円を配分	A
4-(2) 業務効率化 (経費節減)	① ・管理部門の経費削減に引き続き取り組み、管理運営の効率化を推進する。	① ・年々減少している本校の運営費において、限られた予算の範囲で効率的な業務運営を行えるよう、一層の経費節減を掲げ、前年度比△3%以上を目指している。なお決算額には運営費の追加配分による執行を含む。 【平成30年度】 ・当初予算額 37,377千円(前年度比△4.52%) ・決算額 30,618千円←H30.12.31時点 【平成29年度】 ・当初予算額 39,148千円(前年度比△5.60%) ・決算額 45,765千円(前年度比 1.95%) 【平成28年度】 ・当初予算額 41,471千円(前年度比△4.47%) ・決算額 44,889千円(前年度比△7.63%)	A
4-(3) 研修、表彰、人事交流	① ・機構本部の主催する「管理職研修」等への参加を推進する。	① ・「管理職研修」へ1名参加し、管理運営の在り方等について情報交換を行った。	A
	② ・九州・沖縄地区国立大学法人等や第5ブロック研修会への参加を推進する。	② ・西日本地域高等専門学校技術職員特別研修会(機械系)(津山工業高等専門学校主催、1名参加) ・情報公開・個人情報保護制度の運用に関する研修会(九州管区行政評価局主催、1名参加) ・九州地区国立大学法人等技術職員スキルアップ研修A(熊本大学主催、1名参加) ・九州地区国立大学法人等技術専門職員・中堅技術職員研修(宮崎大学主催、3名参加) ・九州地区国立大学法人等テーマ別研修(琉球大学主催、1名参加) ・九州地区国立大学法人等係長研修(大分大学主催、1名参加) ・第5ブロック事務職員研修(熊本高等専門学校主催、3名参加) ・公文書管理研修 I(国立公文書館主催、1名参加)	A
	③ ・高専間職員交流制度を活用し、他高専等への職員派遣に努める。また、鹿児島県内4機関における人事交流を推進する。	③ ・高専機構本部へ職員1名を派遣しており、鹿児島県内4機関の人事交流者は12月現在、事務職員の約45%の14名となっている。今後も鹿児島県内4機関の人事交流を推進する。	A

<p>4-(4) 法令遵守やセキュリティに係る 研修実施等</p>	<p>① ・全教職員に高専機構本部が作成したコンプライアンス・マニュアルを配付し、年1回コンプライアンスに関するセルフチェックを実施し、教職員のコンプライアンスの向上を図る。</p>	<p>① ・機構本部が作成したコンプライアンス・マニュアルに基づき、全教職員がコンプライアンスに関するセルフチェックを実施し、教職員が遵守すべき事項を確認することでコンプライアンスの向上を図った。</p>	<p>A</p>
	<p>②-1 ・全教職員を対象とした科研費説明会等において、「公的研究費等に関する不正使用の再発防止策」「公的研究費の管理・監査のガイドライン」等を踏まえた説明会を実施し、研究費の不正使用防止に取り組む。</p> <p>②-2 ・高専間相互会計内部監査及び公的研究費等内部監査を効果的に実施する。また他高専を含む指摘事項について速やかにフォローアップを行う。</p>	<p>②-1 ・全教職員が高専機構から配信のあった、「公的研究費等に関する不正使用の再発防止策」「公的研究費の管理・監査のガイドライン」等に関する動画を11月5日迄に視聴し、その理解度チェックの確認表と誓約書を提出することで、研究費の不正使用防止に取り組んだ。</p> <p>②-2 ・公的研究費等内部監査 実施日：平成30年9月3日～平成30年10月19日 確認事項：16件（契約、謝金等の事務処理）が報告されたが、各事項については担当係で改善を図った。</p> <p>・高専間相互会計内部監査 都城高専による被監査：平成30年11月19日～20日 不適切・要改善事項：指摘なし 確認事項：5件（会計経理、契約等の事務処理）が報告されたが、関係部署で改善を図った。</p> <p><定義> 不適切事項：現金の亡失、預け金、品名替えやプール金など、極めて重大な不適切な会計処理と認められるもの 要改善事項：処理が未実施だったもの又は処理が規則・本部通知に違反しており、改善を要求したもので、改善計画等報告を求めるもの。 確認事項：良好な会計処理がなされているもの。要改善にはいたらないが会計処理について助言・アドバイスをを行ったもの。</p>	<p>A</p>
	<p>③ ・各地で開催される「研究における不正行為」や「研究費の不正使用」等についての説明会に積極的に参加し、校内での情報共有を図る。</p>	<p>③ ・文部科学省と日本学術振興会が開催する科研費説明会に事務職員1名が参加した。文部科学省ホームページ掲載の説明会資料及び動画を教職員へメールで案内することで、校内での情報共有を図った。</p> <p>・研究推進担当責任者・会計事務担当者説明会（公的研究費の不正使用防止に関する研修会）平成30年9月5日 テレビ会議にて開催（教職員6名参加）</p> <p>・会計監査人による地区別研修会（事務職員対象）（公的研究費に関するコンプライアンス）平成30年12月4日 テレビ会議にて開催（6名参加）</p>	<p>A</p>
	<p>④ ・全教職員の情報セキュリティに関する意識を高める取組を行う。</p>	<p>④ ・e-Learningにより10月下旬に、全教職員を対象とした情報セキュリティ教育の研修を実施し、全員受講した。</p> <p>・全教職員に「情報セキュリティに関するチェックリスト」を配布し、要機密情報に関する管理・運用の理解を図った。併せて全員から誓約書を徴集した。</p>	<p>A</p>

<自己評価の標語> S:目標以上に達成している A:達成している A':概ね達成している B:一部達成している C:達成していない

広報活動

		校数
○中学校へ出向いての高校説明会	県内	81校
	県外	0校
	小計	81校
○中学校個別訪問(10～12月)	県内	41校
	県外	0校
	小計	41校
○一日体験入学PR訪問(6～7月)	県内	72校
	県外	0校
	小計	72校
合計		194校

◆中学校教員向け進学説明会

会場	日程	回数	中学生	保護者	教員	その他	計
本校会場	6/28(木)	1			27		27
鹿児島市(かごしま県民交流センター)	6/29(金)	1			27		27
合計		2	0	0	54	0	54

◆塾・予備校関係者向学校説明会

会場	日程	回数	中学生	保護者	教員	その他	計
本校会場	6/28(木)	1			15		15
鹿児島市(かごしま県民交流センター)	6/29(金)	1			9		9
合計		2	0	0	24	0	24

◆中学生及び保護者のための学校説明会

会場	日程	回数	中学生	保護者等	教員	その他	計
・鹿児島市(宝山ホール)	10/6(土)	2	26	35			61
・鹿屋市(リナシティかのや)	10/13(土)	1	6	10			16
・本校会場①	10/7(日)	1	33	53			86
・本校会場②	10/14(日)	1	50	70			120
合計		5	115	168	0	0	283

◆一日体験入学

会場	日程	回数	中学生	保護者	教員	その他	計
本校会場	8/5(日)	1	448	360			808

平成29年度

広報活動

		校数
○中学校へ出向いての高校説明会	県内	81校
	県外	0校
	小計	81校
○中学校個別訪問(10～12月)	県内	25校
	県外	0校
	小計	25校
○一日体験入学PR訪問(6～7月)	県内	61校
	県外	0校
	小計	61校
合計		167校

*本年度は高校説明会へ出席した中学校へのPR訪問は行わなかった。

◆中学校教員向け進学説明会

会場	日程	回数	中学生	保護者	教員	その他	計
本校会場	6月29日	1			26		26
鹿児島市(かごしま県民交流センター)	6月30日	1			31		31
	合計	2	0	0	57	0	57

*学外

◆塾・予備校関係者向学校説明会

会場	日程	回数	中学生	保護者	教員	その他	計
本校会場	6月29日	1			16		16
鹿児島市(かごしま県民交流センター)	6月30日	1			9		9
	合計	2	0	0	25	0	25

*学外

◆中学生及び保護者のための学校説明会

会場	日程	回数	中学生	保護者等	教員	その他	計
・鹿児島市(宝山ホール)	10月7日	2	28	42			70
・鹿屋市(リナシティかのや)	10月14日	1	5	10			15
・本校会場①	10月8日	1	64	80			144
・本校会場②	10月15日	1	30	42			72
	合計	5	127	174	0	0	301

*学外

*学外

◆一日体験入学

会場	日程	回数	中学生	保護者	教員	その他	計
本校会場	10月8日	1	247	155			402

*8/6開催予定の体験入学が台風接近に伴い中止となり、あらためて10/8に実施した。

平成28年度

広報活動

		校数
○中学校へ出向いての高校説明会	県内	84校
	県外	0校
	小計	84校
○中学校個別訪問(10~12月)	県内	171校
	県外	0校
	小計	171校
○一日体験入学PR訪問(6~7月)	県内	143校
	県外	0校
	小計	143校
合計		398校

◆中学校教員向け進学説明会

会 場	日 程	回 数	中学生	保護者	教員	その他	計
本校会場	6月21日	1			27		27
鹿児島市(宝山ホール)	6月23日	1			28		28
	合計	2	0	0	55	0	55

*学外

◆塾・予備校関係者向学校説明会

会 場	日 程	回 数	中学生	保護者	教員	その他	計
本校会場	6月21日	1			25		25
鹿児島市(宝山ホール)	6月23日	1			14		14
	合計	2	0	0	39	0	39

*学外

◆中学生及び保護者のための学校説明会

会 場	日 程	回 数	中学生	保護者	教員	その他	計
・薩摩川内市(川内文化ホール)	10月1日	1	8	8		0	16
・鹿児島市(かごしま県民交流センター)	10月2日	2	13	15		4	32
・鹿屋市(リナシティかのや)	10月15日	1	9	10		1	20
・本校会場	10月16日	1	67	68		28	163
	合計	5	97	101	0	33	231

*学外

◆一日体験入学

会 場	日 程	回 数	中学生	保護者	教員	その他	計
本校会場	8月7日	1	372	260			632

鹿児島高専 公開講座

平成30年度

資料 2

7/28
&
8/20

ロボット制御を体験しよう

～レゴブロックで作ったロボットのプログラミング体験～

レゴブロックで作ったロボットを制御するためのプログラムづくりを体験します。自分の思い通りに動かすプログラムをパソコンでつくってみましょう。

①7/28(土)

- ★定員:6名
- ★時間:9:00～12:00
- ★対象:小学5年生～中学生
- ★会場:鹿児島高専
- ★締切:7/19(木)

霧島市教育委員会後援

②8/20(月)

- ★定員:6名
- ★時間:9:00～12:00
- ★対象:小学5年生～中学生
- ★会場:鹿児島高専
- ★締切:8/8(水)

8/20
(月)

プログラミングに挑戦!

- ★定員:5名
- ★時間:9:30～12:00
- ★対象:中学生
- ★会場:鹿児島高専
- ★締切:8/8(水)

プログラミングに挑戦!初めての方でも大丈夫。ブロックを並べるビジュアルプログラミングでロボットを動かそう。動かし方はあなた次第!

8/25(土) リモコン戦車(バトルタイタン)を組み立てて電子制御を知ろう

- ★定員:8名
- ★時間:9:00～12:00
- ★対象:小学4年生～中学生
- ★会場:鹿児島高専
- ★締切:7/19(木)
- ★材料費:4,104円

*受講決定後に、材料を事前購入しますので、キャンセル及び欠席の場合でも、材料費・送料がかかります。

霧島市教育委員会後援

対戦型戦車「バトルタイタン」を製作して、もの作りの楽しさや電子制御に触れよう。兄弟で参加すると、自宅でもバトルタイタンで遊べるぞ。

8/28(火) 電気電子ビルダース ～メロディ付き デジタル時計を作っちゃお!～

- ★定員:10名
- ★時間:13:30～16:00
- ★対象:小学4年生～中学生
- ★会場:鹿児島高専
- ★締切:8/6(月)

霧島市教育委員会後援

マイコンを使ってメロディ付きの小型のデジタル時計を作ってみよう。どうやって数字を表示するのか、どうやって音を鳴らすのか、電気電子の不思議を楽しみましょう!

8/4
(土)

ミクロの世界をのぞこう!!

～さわれる? 見えない世界～

- ★定員:6名
- ★時間:10:00～13:00
- ★対象:小学4年生～中学生
- ★会場:鹿児島高専
- ★締切:7/24(火)

霧島市教育委員会後援

普段触れることのない電子顕微鏡でミクロの世界をのぞいたり、観察した対象物を3Dプリンタで立体的な作成を通して、科学技術分野に対する興味やもの作りの楽しさを体験しましょう。

11/11
(日)

離島小中学生への電気エネルギー・技術史教室

- ★定員:8名
- ★時間:10:00～14:00
- ★対象:小学4年生～中学生
- ★会場:種子島中学校
- ★締切: / ()

電気エネルギーが伝わるモデルを製作して「ものづくり」の楽しさを実感します。また、大河ドラマでも描かれる郷土の先輩たちのすばらしさを学びます。

8/20
(月)

電気電子ビルダース ～金属探知機を作っちゃお!～

- ★定員:10名
- ★時間:13:30～16:00
- ★対象:小学4年生～中学生
- ★会場:鹿児島高専
- ★締切:8/6(月)

霧島市教育委員会後援

マイコンを使って金属を感じる「金属探知機」を作ってみよう。どうやって金属を感じるのか、どうやってLEDを光らすのか、電気電子の不思議を楽しみましょう!

8/27
(月)

振動と音の実験をしてみよう!

- ★定員:8名
- ★時間:13:00～16:00
- ★対象:小学5年生～中学生
- ★会場:鹿児島高専
- ★締切:8/16(木)

霧島市教育委員会後援

振動の世界を体験しよう。キッツキおもちゃの動きを調べよう。また、フイングラスの鳴き現象について考え、機械の振動現象の基本的理論に触れてみましょう。

8/29
(水)

電気電子ビルダース ～電子楽器を作っちゃお!～

- ★定員:10名
- ★時間:13:30～16:00
- ★対象:小学4年生～中学生
- ★会場:鹿児島高専
- ★締切:8/6(月)

霧島市教育委員会後援

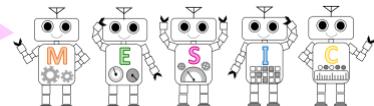
距離センサとマイコンを使って、手の動きで音程が変わる楽器を作ろう。手の動きで電気信号がどのように変わるのか、電気電子の不思議を楽しみましょう!



今年度より、Web申込みが可能ですよ!

本校ホームページにアクセスしていただき、WEB上でお申込みください。FAX・メールでも受け付けをいたしますが、電話での受け付けは行いません。

申込者多数の場合は、抽選になります!



独立行政法人 国立高等専門学校機構

鹿児島工業高等専門学校 学生課 教務係

〒899-5193 霧島市隼人町真孝1460-1

TEL: 0995-42-9014

FAX: 0995-43-2584

e-mail: kouhou@kagoshima-ct.ac.jp



高専チャレンジ

平成30年度

冬の公開講座

機械 工学科

ガラスを削ってオリジナルコップ を作ろう



○内容

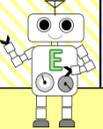
コップの表面に小さな砂を吹きつけることでガラスを削り絵柄や文字を刻むことができます。透明なコップに好きなデザインや文字を刻んで、世界に1つしかない自分だけのコップを作ってみよう！

- ★定員：10名
- ★対象：小学5年生以上
- ★会場：実習工場 他
- ★参加費：250円

- ★開催日：12月16日（日）
- ★時間：9：00～12：00
- ★対象：小学5年生～中学生
- ★会場：鹿児島高専
- ★申込締切：11/14（水）

電気電子 工学科

電子工作！光る・鳴るピンポン 雪だるま



○内容

メロディIC・スピーカ、LEDとピンポン球で作った雪だるまをボード上に構成します。製作した回路に乾電池を接続して、動作を確認しよう！製作物は各自持ち帰ることができます。

- ★定員：8名
- ★対象：小学5年生以上
- ★会場：専攻科棟
共用教室
- ★参加費：50円

機械 工学科

ペットボトルロケットを飛ばそう

○内容

ロケットが宇宙に飛び上がる基礎原理を身近にある「ペットボトル」、「水」それと「空気入れ」で再現します。ロケット打ち上げ場を二つも持つ鹿児島県で自作のロケットを打ち上げてみよう！

- ★定員：10名
- ★対象：小学5年生以上
- ★会場：熱機関実験室
- ★参加費：350円

都市環境 デザイン 工学科

スゴいぞ！コンクリート！



○内容

ビル、トンネル、橋など、色々な構造物に使われているコンクリートを体験する講座です。実際にコンクリートを作って、固まったものの強さを競います。コンクリートはお好み焼きの生地を作るように、水、セメント、砂などを混ぜて作ります。その他にも鉄筋の引張強さ試験の見学を予定しています。

- ★定員：10名
- ★対象：小学校5年生以上
- ★会場：材料実験室
- ★参加費：50円

電子制御 工学科

電子ゴマを 作ろう

○内容

遠心力を電源のスイッチに利用したゴマの電子キットです。ゴマを回すとその遠心力により電源スイッチが入り4色の発光ダイオードが点灯同時にメロディICの音が流れます。ゴマが安定して回っている間中、美しい光の輪とメロディを楽しめます。初心者の方にも簡単に作れます。作った電子ゴマは持ち帰ることが出来ます。

- ★定員：20名
- ★対象：小学5年生以上
- ★会場：電子制御工学科棟
2F
- ★参加費：500円

都市環境 デザイン 工学科

トラス橋を作ろう！

○内容

2～3人で協力してトラスの橋を作ります。トラスとは三角形を基本とした構造形式で、私達の身の回りにもたくさん見ることができます。材料は竹ひごで、グルーガンを使って接着します。グルーガンを使ったことがなくてもすぐに使えるようになります。橋が完成したら加力実験を行って強度を競います。

- ★定員：20名
- ★対象：小学校5年生以上
- ★会場：都市環境デザイン
演習室
- ★参加費：50円

今年度より、Web申込みが可能です！

本校ホームページにアクセスしていただき、WEB上でお申込みください。
なお、FAX・メールでも受け付けをいたしますが、電話での受け付けは行いません。

申込者多数の場合は、
抽選になります！

独立行政法人 国立高等専門学校機構

鹿児島工業高等専門学校 学生課 教務係

〒899-5193 霧島市隼人町真孝1460-1

TEL:0995-42-9014 FAX:0995-43-2584 E-mail:kouhou@kagoshima-ct.ac.jp



平成30年度 鹿児島高専における公開講座・出前講座の実施状況調査報告書

No.	公開講座名	実施日	時間数	対象者	募集定員	受講者数	備考
1	ロボット制御を体験しよう ーレゴブロックで作ったロボットのプログラミング体験ー	7/28(土)	3	小学5年生～中学生	6	20	・小学生13名 ・中学生 7名
2	ミクロの世界をのぞこう！！ ～さわれる？！見えない世界～	8/4 (土)	3	小学4年生～中学生	6	6	・小学生4名 ・中学生2名
3	ロボット制御を体験しよう ーレゴブロックで作ったロボットのプログラミング体験ー	8/20(月)	3	小学5年生～中学生	6	20	・小学生14名 ・中学生 6名
4	電気電子ビルダーズ ～金属探知機を作っちゃお！～	8/20(月)	2.5	小学4年生～中学生	10	10	・小学生10名
5	プログラミングに挑戦！	8/20(月)	2.5	中学生	5	20	・小学生 2名 ・中学生18名
6	電気電子ビルダーズ ～スマホ操縦ローバーを作っちゃお！～	8/22 (水)	4	小学4年生～中学生 (会場:徳之島の小学校)	10	-	台風のため中止
7	リモコン戦車(バトルタイタン)を組み立てて電子制御を知ろう	8/25(土)	3	小学4年生～中学生	8	8	・小学生6名 ・中学生2名
8	振動と音の実験をしてみよう！	8/27(月)	8	小学5年生～中学生	8	6	・小学生2人 ・中学生4名
9	電気電子ビルダーズ ～メロディ付きデジタル時計を作っちゃお！～	8/28(火)	2.5	小学4年生～中学生	10	10	・小学生9名 ・中学生1名
10	電気電子ビルダーズ ～電子楽器を作っちゃお！～	8/29(水)	2.5	小学4年生～中学生	10	7	・小学生4名 ・中学生3名
11	ミクロの世界をのぞこう！！ ～さわれる？！見えない世界～	10/21(日)	3	小学4年生～中学2年生	6	4	・小学生3名 ・中学生1名
12	ミクロの世界をのぞこう！！ ～さわれる？！見えない世界～	11/11(日)	3	小学4年生～中学2年生	6	0	申込みなし
13	ミクロの世界をのぞこう！！ ～さわれる？！見えない世界～	12/9 (日)	3	小学4年生～中学2年生	6	2	・小学生1名 ・中学生1名
14	離島小中学生への電気エネルギー・技術史教室	11/11(日)	8	小学4年生～中学生	8	8	・小学生8名
15	ガラスを削ってオリジナルコップを作ろう	12/16(日)	2	小学5年生～中学生	10	6	・小学生4名 ・中学生2名
16	ペットボトルロケットを飛ばそう	12/17(日)	2	小学5年生～中学生	10	4	・小学生4名
17	電子工作！光る・鳴るピンポン雪だるま	12/18(日)	2	小学5年生～中学生	8	2	・小学生2名
18	電子ゴマをつくろう	12/19(日)	2	小学5年生～中学生	20	6	・小学生4名 ・中学生2名
19	トラス橋を作ろう！	12/20(日)	2	小学5年生～中学生	20	0	
20	スゴいぞ！コンクリート！	12/21(日)	2	小学5年生～中学生	10	1	・中学生1名
合計 講座		—	—	—	—	140	

No.	出前講座名	実施日	時間数	対象者	募集定員	受講者数	備考
1	富隈小学校 公開講座「プログラミング体験」	8/19 (土/午前)	3	小学4～6年生		11	・小学生11名 ・保護者等13名
2	富隈小学校 公開講座「プログラミング体験」	8/19 (土/午後)	3				
3	富隈小学校 公開講座「ロボット制御講座2」	11/19 (日/午前)	3	小学4～5年生		5	・小学生5名 ・保護者等8名
4	富隈小学校 公開講座「ロボット制御講座3」	11/19 (日/午後)	3	中学2～3年生		4	・中学生4名 ・保護者等5名
5	富隈中学校 公開講座「ロボット制御講座1」	12/16 (土/午前)	3	小学4～5年生		4	・小学生4名 ・保護者7名
6	富隈中学校 公開講座「ロボット制御講座2」	12/16 (土/午後)	3	小学4～5年生		3	・小学生3名 ・保護者4名
7	サイエンスリーダー養成講座(ロボット講座)	1/14 (日)	4	小学6年生～中学2年生		30	始良市教育委員会主催
8	メカトロニクス研究部小学校訪問 (鹿児島市立東昌小学校)	2/26 (月)	2	小学生		42	
9	メカトロニクス研究部小学校訪問 (南さつま市立加世田小学校)	2/27 (火)	2	小学生		204	
10	メカトロニクス研究部小学校訪問 (南さつま市立長屋小学校)	2/27 (火)	1	小学生		15	
11	メカトロニクス研究部小学校訪問 (南九州市立霜出小学校)	2/28 (水)	3	小学生		89	
12	出前授業(霧島市立舞鶴中学校)	2/1 (金)	1	中学2年生		30	情報工学科:古川先生
合計 講座		—	—	—	—	437	

平成29年度 鹿児島高専における公開講座・出前講座の実施状況調査報告書

No.	公開講座名	実施日	時間数	対象者	募集定員	受講者数	備考
1	ミクロの世界をのぞこう！！ ～さわれる？！見えない世界～	7/23 (日)	3	小学4年生～中学生	6	6	小学生6名
2	ロボット制御を体験しよう ーレゴブロックによるロボットづくりと プログラミングー	7/29 (土)	4	小学6年生～中学生	8	8	小学生4名 中学生4名
3	離島小中学生への電力教室	8/3 (木)	4	小学4年生～中学生	8	6	中学生6名
4	熱エネルギーを利用して走るエンジンカーを 製作してみよう	8/18 (金)	3	中学生	7	7	中学生7名
5	リモコン戦車（バトルタイタン）を 組み立てて電子制御を知ろう	8/19 (土)	3	小学4年生～中学生	8	8	小学生8名
6	モノが削れるふしぎをスーパースローで 見てみよう ～ハイスピードカメラで見る「削り」のメカニズム～	8/22 (火)	3	中学生	5	4	中学生4名
7	プログラミングに挑戦！	8/23 (水)	2.5	中学生	5	5	中学生5名
8	電気電子工作で電子楽器を作っちゃお！	8/24 (木)	2	小学4年生～中学生	10	9	小学生8名 中学生1名
9	電気電子工作でメロディ付きデジタル時計を 作っちゃお！	8/29 (火)	2.5	小学4年生～中学生	10	10	小学生10名
10	ミクロの世界をのぞこう！！ ～さわれる？！見えない世界～	11/12 (日)	3	小学4年生～中学生	6	5	小学生2名 中学生3名
11	ミクロの世界をのぞこう！！ ～さわれる？！見えない世界～	12/17 (日)	3	小学4年生～中学生	6	4	小学生2名 中学生2名
12							
13							
合計 講座		—	—	—	—	72	

No.	出前講座名	実施日	時間数	対象者	募集定員	受講者数	備考
1	富隈小学校 公開講座「プログラミング体験」	8/19 (土/午)	3	小学4～6年生		11	小学生11名、 保護者等13名
2	富隈小学校 公開講座「プログラミング体験」	8/19 (土/午)	3				
3	富隈小学校 公開講座「ロボット制御講座2」	11/19 (日/午)	3	小学4～5年生		5	小学生5名 保護者等8名
4	富隈小学校 公開講座「ロボット制御講座3」	11/19 (日/午)	3	中学2～3年生		4	中学生4名 保護者等5名
5	富隈中学校 公開講座「ロボット制御講座1」	12/16 (土/午)	3	小学4～5年生		4	小学生4名 保護者7名
6	富隈中学校 公開講座「ロボット制御講座2」	12/16 (土/午)	3	小学4～5年生		3	小学生3名 保護者4名
7	サイエンスリーダー養成講座（ロボット講座）	1/14 (日)	4	小学6年生～中学2年生		30	始良市教育委員会 主催
8	メカトロニクス研究部小学校訪問 (鹿児島市立東昌小学校)	2/26 (月)	2	小学生		42	
9	メカトロニクス研究部小学校訪問 (南さつま市立加世田小学校)	2/27 (火)	2	小学生		204	
10	メカトロニクス研究部小学校訪問 (南さつま市立長屋小学校)	2/27 (火)	1	小学生		15	
11	メカトロニクス研究部小学校訪問 (南九州市立霜出小学校)	2/28 (水)	3	小学生		89	
12							
合計 講座		—	—	—	—	407	

平成28年度 鹿児島高専における公開講座・出前講座の実施状況調査報告書

No.	公開講座名	実施日	時間数	対象者	募集定員	受講者数	備考
1	ミクロの世界をのぞこう！！ ～さわれる？！見えない世界～	7/17（日）	3	小学4年生～中学生	6	2	小学生2名
2	リモコン戦車（バトルタイタン）を 組み立てて電子制御を知ろう	8/20（土）	3.5	小学4年生～中学生	8	7	小学生3名 中学生4名
3	モノが削れるふしぎをスーパースローで見よう —高 速度カメラで覗く「削り」のメカニズム— ロボット制御を体験しよう	8/19（金）	3	中学生	5	1	中学生1名
4	—レゴブロックによるロボットづくりと コンピュータ制御—	7/30（土）	4	小学6年生～中学生	8	8	小学生3名 中学生5名
5	女子限定！小学生・中学生のための 電子工作・デザイン教室 （ソフトプラザかごしま）	8/19（金）	3	小学4年生～中学生 （女子）	12	6	小学生4名 中学生2名
6	女子限定！小学生・中学生のための 電子工作・デザイン教室 （鹿児島高専）	8/20（土）	3	小学4年生～中学生 （女子）	12	22	小学生18名 中学生4名
7	離島小中学生への電力教室	8/2（火）	4	小学4年生～中学生	8	6	中学生6名 [教員4名 一般1名]
8	いろんな電気素子を使ってLEDを いろんなふうに光らせてみよう	8/30（火）	2	小学5年生～中学生	15	15	小学生10名 中学生5名
9	「スターリングエンジンの製作講座」 —ビー玉や空き缶でエンジンを作ろう—	8/17（水）	3	小学5年生～中学生	5	5	小学生4名 中学生1名
10	プログラミングに挑戦！	8/24（水）	3	中学生	5	5	中学生5名
11	ミクロの世界をのぞこう！！ ～さわれる？！見えない世界～	9/11（日）	3	小学4年生～中学生	6	2	小学生2名
12	ミクロの世界をのぞこう！！ ～さわれる？！見えない世界～	12/18（日）	3	小学4年生～中学生	6	3	小学生3名
13							
合計講座		—	—	—	—	82	

No.	出前講座名	実施日	時間数	対象者	募集定員	受講者数	備考
1	富隈小学校 公開講座	11/26 （土）	3	小学4年生～6年生とその保護者	10組 （20名）	23	小学生10名、保護者10名、教職員3名
2	サイエンスリーダー養成講座（ロボット講座）	1/15 （日）	4	小学生・中学生		26	始良市教育委員会主催
3	メカトロニクス研究部小学校訪問 （南さつま市立内山田小学校）	2/27 （月）	2	小学生		46	
4	メカトロニクス研究部小学校訪問 （大崎町立大崎小学校）	2/28 （火）	2	小学生		312	
5	メカトロニクス研究部小学校訪問 （志布志市立通山小学校）	2/28 （火）	2	小学生		170	
6	メカトロニクス研究部小学校訪問 （屋久島町立小瀬田小学校）	3/1（水）	1	小学生		66	
7	メカトロニクス研究部小学校訪問 （屋久島町立安房小学校）	3/2（木）	2	小学生		75	
8	メカトロニクス研究部小学校訪問 （屋久島町立宮浦小学校）	3/2（木）	1	小学生		93	
9	メカトロニクス研究部小学校訪問 （屋久島町立神山小学校）	3/3（金）	2	小学生		88	
合計講座		—	—	—	—	899	

インターンシップ参加実績(過去4年分)

学科	30年度			平成29年度			平成28年度			平成27年度		
	全体人数	応募者	割合	全体人数	応募者	割合	全体人数	応募者	割合	全体人数	応募者	割合
機械工学科	43	47	84%	36	35	81%	40	43	83%	45	13	83%
電気電子工学科	37	38	76%	32	19	47%	42	33	57%	35	27	51%
電子制御工学科	41	54	98%	45	50	78%	42	38	83%	43	44	58%
情報工学科	41	42	80%	36	33	75%	35	22	54%	37	11	19%
都市環境デザイン工学科	43	37	86%	41	39	85%	41	38	85%	35	34	91%
本科その他学年		3			4			3			4	
本科計	205	221	86%	190	180	76%	200	177	75%	195	133	48%
機械・電子システム工学専攻	9	4	44%	13	4	31%	12	5	42%	15	3	20%
電気情報システム工学専攻	12	6	42%	11	3	27%	5	2	40%	12	10	67%
土木工学専攻	6	5	83%	7	4	57%	3		0%	2	0	0%
専攻科その他学年					0						0	
専攻科計	27	15	52%	31	11	35%	20	7	35%	29	13	38%
合計	232	236	82%	221	191	71%	220	184	71%	224	146	47%

※1人で2社参加している場合は、2人としてカウント

1 教育に関する事項

(5) 学生支援・生活支援等ー ⑤

【寮施設整備実績】

H27年度

1. 第四志学寮の老朽化した床の改修
2. 脱衣室空調設備の設置
3. 外周雨水側溝の転落防止策の設置

H28 年度

1. 防犯カメラの設置
2. 第七志学寮エアコン増設
3. 第六志学寮壁紙補修
4. 第一志、第五志学寮の劣化した洗濯干場跡の解体
5. 第五志学寮の女子寮転用に伴う防犯強化
 - ・建物外周フェンスの設置
 - ・建物出入口に機械警備を設置
 - ・建物入口カードキー設置

H29 年度

1. 第一・二志学寮乾燥機増設(11 台)
2. 第二志学寮・男子浴場のトイレの洋式化(5 ブース)
3. 第二・四・五志学寮のトイレ個室の個別照明設置(27ヵ所)
4. 自習室(第一・二・五・六志学寮)のエアコン設置(4台)
5. 第五志学寮三階居室のクロス張替え(予定)

H30 年度

1. 第一・二志学寮乾燥機更新(11 台)
2. 第四志学寮・女子寄宿舍のトイレの洋式化(7 ブース)
3. 第一志学寮の照明器具の LED 化(寮室 172 台)
4. 寄宿舍食堂の食堂空調機更新(4 台), 厨房・下処理室空調機新設
5. 第一志学寮付近ワシントンヤシ伐採(建物の安全性の確保)

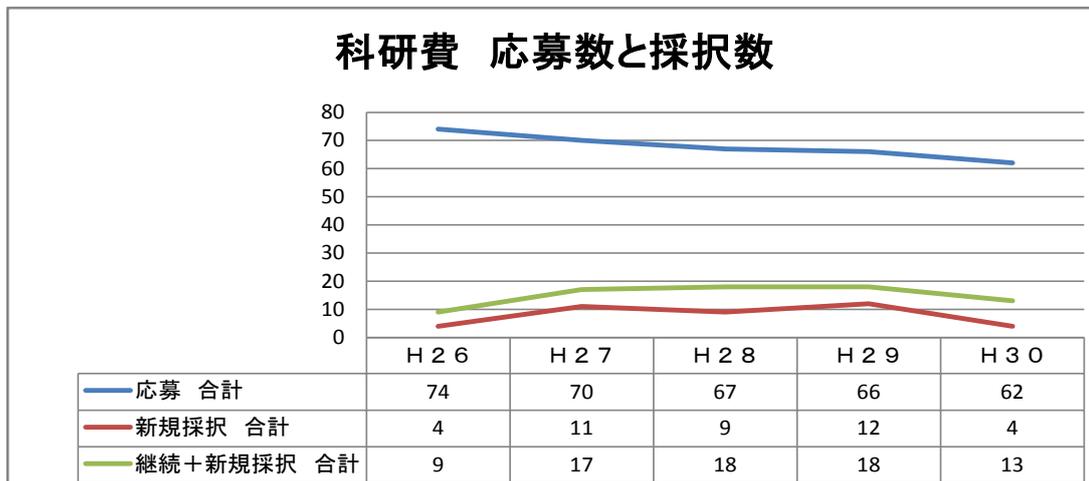
平成 31 年度概算要求事項

第一志学寮改修工事

- ・経年 49 年
- ・平成 2 年度に外部、内装改修工事実施。
- ・女子学生定員不足解消のため、第一志学寮を女子寮として改修。

概算要求事項として計上し、平成 31 年度で実施予定。

(1) 科研費と外部資金— ①



(4) 鹿児島高専テクノクラブ (KTC) — ②

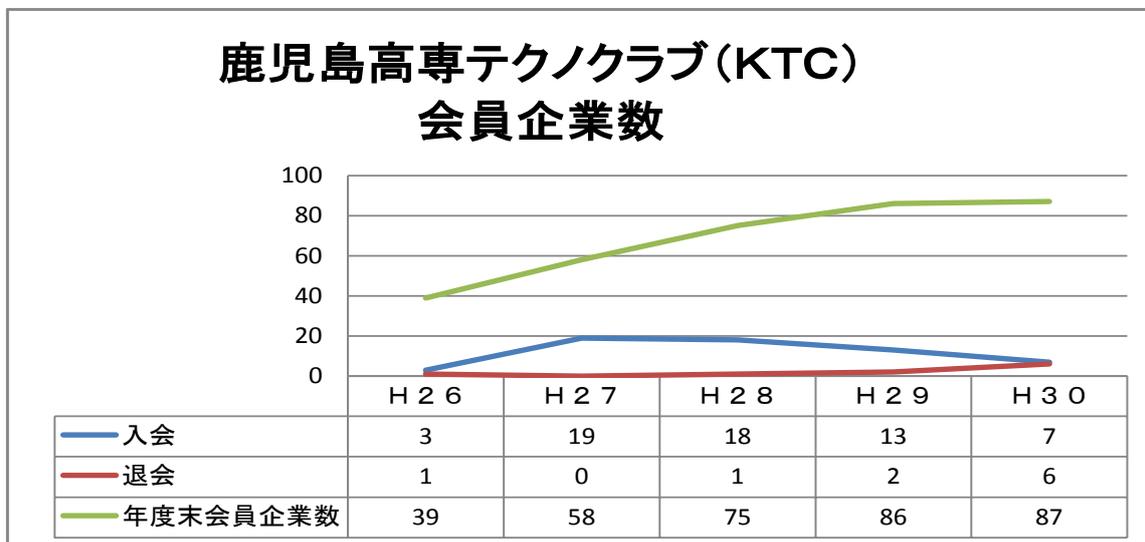


表1 海外学術協定校一覧 ※締結日は最新の日付

相手機関	相手国	締結日	対象
1 ハワイ大学カウアイコミュニティカレッジ	アメリカ合衆国	2018/8/20	鹿児島高専
2 トゥールーズIUT	フランス	2016/2/25	鹿児島高専
3 モンペリエIUT	フランス	2016/1/21	鹿児島高専
4 マレーシア工科大学 (UTM)	マレーシア	2016/9/26	鹿児島高専
5 韓国海洋大学校アイディアファクトリー (KMOU)	韓国	2019/1/8	鹿児島高専
6 キングモンクット工科大学ラカバン校 (KMITL)	タイ	2011/1/10	高専機構
7 ニーアンポリテクニク (NP)	シンガポール	2011/9/27	高専機構
8 ナンヤンポリテクニク (NYP)	シンガポール		
9 テマセクポリテクニク (TP)	シンガポール		
10 シンガポールポリテクニク (SP)	シンガポール		
11 リパブリックポリテクニク (RP)	シンガポール		
12 香港職業訓練協議会 (VTC)	香港	2012/1/9	高専機構
13 ペトロナス工科大学 (UTP)	マレーシア	2014/2/6	九州沖縄地区高専
14 ガジャマダ大学 (UGM)	インドネシア	2014/2/6	九州沖縄地区高専
15 ガジャマダ大学専門学校	インドネシア	2014/2/6	九州沖縄地区高専
16 キングモンクット工科大学北バンコク校 (KMUTNB)	タイ	2014/2/7	九州沖縄地区高専
17 カセサート大学 (KU)	タイ	2014/2/10	九州沖縄地区高専
18 ハノイ大学 (HANU)	ベトナム	2015/6/15	九州沖縄地区高専
19 廈門理工学院 (XMUT)	中国	2014/6/28	九州沖縄地区高専
20 モンゴル科学技術大学 (MUST)	モンゴル	2014/8/2	九州沖縄地区高専
21 台北科学技術大学 (NTUT)	台湾	2015/3/3	九州沖縄地区高専
22 キングモンクット工科大学トンブリ校 (KMITL)	タイ	2016/3/1	九州沖縄地区高専
23 ダナン科学技術大学 (DUT)	ベトナム	2017/2/22	九州沖縄地区高専

表2 海外インターンシップ派遣及び受入実績

形態	相手先	相手国	人数	期間
(海外学術協定校) 受入1名、派遣5名				
受入	トゥールーズIUT	フランス	1名	2018/4/9-4/20
派遣	マレーシア工科大学	マレーシア	2名	2018/9/10-9/21
派遣	カセサート大学	タイ	1名	2018/8/19-9/16
派遣	トゥールーズIUT	フランス	1名	2019/2/24-3/26
派遣	ライブニッツ工科大学	ドイツ	1名	2019/2/27-3/28
(企業) 受入1名、派遣3名				
受入	株式会社エルム (南さつま市)	フランス	1名	2018/4/21-6/28 (鹿児島高専滞在後)
派遣	MK Watertech.Co.Ltd	タイ	1名	2018/8/19-9/15
派遣	Jurong Engineering Limited	シンガポール	2名	2017/9/1-9/20

表3 学生交流実績

プログラム内容	相手機関	人数	期間
(派遣) 37名			
台湾サマープログラム	台湾政治大学	8名	2018/9/25-9/29
テクニカルチャレンジ2018(香港) (全国高専と合同)	香港VTC/IVE	1名	2018/8/26-9/5
海外異文化研修	ストックホルムNTI・ウプサラ大学 (スウェーデン)	8名	2018/9/18-9/27
海外語学研修	ハワイ大学・カウアイコミュニティ カレッジ(アメリカ合衆国)	7名	2018/9/2-9/22
ペナン異文化体験型研修 (全国高専と合同)	豊橋技術科学大学マレーシア教育拠点 (マレーシア・ペナン)	2名	2018/9/2-9/9
HANU(ハノイ工科大学)語学研修 (九州沖縄地区高専と合同)	ハノイ大学	1名	2018/9/11-9/21
海外語学研修	ニュージーランド・ALA工科大学	7名	2018/9/2-9/18
春季台湾研修 (九州沖縄地区高専と合同)	台湾 静宜大学	1名	2019/3/24-3/30
Robogals世界支部の国際会議出席 (イギリス 北アイルランド)	Robogals Kagoshimaによる海外活動	2名	2018/11/6-11/9
(受入) 27名			
さくらサイエンスプラン	ダナン科学技術大学	10名	2018/10/19-10/28
海外異文化研修事後学習	ストックホルムNTI (スウェーデン)	7名	2019/1/16-1/22
さくらサイエンスプラン	マレーシア工科大学	10名	2019/2/14-2/21

表4 教員の海外派遣及び受入

相手先	相手国	人数	目的	
(派遣) 9名				
ストックホルムNTI	スウェーデン	1名	VRワークショップ打合せ	2018/5
韓国国立海洋大学	韓国	2名	国際シンポジウム・インターン シッププログラム打合せ	2018/9
SERC(South Eastern Regional College)	イギリス	1名	学術交流協定打合せ 語学研修プログラム打合せ	2018/11
ライブニッツ工科大学	ドイツ	1名	インターンシッププログラム打合せ	2018/11
マレーシア工科大学	マレーシア	1名	研究に関する打合せ 学生交流プログラム打合せ	2018/12
SERC(South Eastern Regional College)	イギリス	3名	学術交流協定締結	2019/3
(受入) 13名				
SERC(South Eastern Regional College)	イギリス	3名	今後の交流についての協議	2018/6
トゥールーズIUT	フランス	1名	短期留学生のインターンシップ先視 察	2018/6
ストックホルムNTI	スウェーデン	1名	VRワークショップの実施	2018/7
ダナン科学技術大学	ベトナム	1名	さくらサイエンスプラン 引率	2018/10
韓国国立海洋大学	韓国	1名	国際シンポジウム参加	2019/1
ストックホルムNTI高校	スウェーデン	3名	海外異文化研修事後学習 引率	2019/1
マレーシア工科大学	マレーシア	2名	研究に関する打合せ 学生交流プログラム打合せ	2019/1
マレーシア工科大学	マレーシア	1名	さくらサイエンスプラン 引率	2019/2

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

評価項目 1 教育に関する事項 (1) 入学者の確保

通し番号	項目	事前コメント	回答
	1-(1)-①	①-1 ・情報発信については、イベントや学校説明会など積極的に行っており、評価したい。学校でどんな活動、研究をしているか、メディアの報道等により、地域の人々に目に見える形で示すことは説得力があり、関心を持ってもらえる。教職員が多忙というのは承知しているが、学校の特長やトピックスなど、今後もアピールすることが重要と考える。	・コメントいただいた内容を基に、今後、本校が活動及び研究している内容をメディアを通じて積極的にアピールしていきたいを思います。
	1-(1)-①	①-3 ・JR車人駅の掲示物ほどのようなものか、本校の魅力のアピールするに十分な内容になっているか？管理体制はどうなっているのか？	・入試関係や学外者に向けてのイベント関係等を中心にポスター掲示しており、管理に関しては、ポスターを張り替える際に掲示フレームの子エックを行っております。本校掲示スペースはJR車人駅1番ホームから2・3番ホームに続く階段の壁に設置しており、万一、破損等があった場合は、JR車人駅より連絡をもらえるようになっています。
	1-(1)	・ロボギヤルズやメカトロニクス部などによる出前講座、公開講座は好評と聞く。小中学生に工学への興味を持ってもらうだけでなく、学生にとっても教育現場に立つことは大きな経験になる。地域とつながる機会でもあり、さらなる充実を期待したい。	・現在、ロボギヤルズ、メカトロニクス研究部の活動の中には、学校からの依頼により、広報活動として活動している部分もあります。学生本人が広報活動やその他の活動を通じて、教育上の経験の幅を広げていけるように学校として検討を行っていきたいと思います。

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

評価項目 1 教育に関する事項 (2) 教育課程の編成等

通し番号	項目	事前コメント	回答
	1-(2)-②	・目指している学科改組について教えて欲しい。	・本件については、会議の際、担当教員から説明します。
	1-(2)-②	<p>・平成32年を目標に学科改組を検討されているとのことであるが、高専機構との要 検討事項にもあるように、どのような「インサイトプロセス」を用いて地域のニーズを 把握されているのか 参考までに説明して頂きたい。</p> <p>※インサイトプロセス 「洞察したい相手の視野から得られるその人の気持ち・本音などをどのように捉 える仕組み」を有しているのか</p>	<p>・産業界、各種団体等から聞き取り調査をしたことにより、将来の地域ニーズを把 握しようとしています。</p>
	1-(2)-②	・教育課程の編成のなかで、学科改組に触れています。その狙い、内容は？	・本件については、会議の際、担当教員から説明します。
	1-(2)-⑧	<p>・学生を体育大会やロボコン、プロコン等様々な全国大会に積極的に参加させてい ることは、大変素晴らしいことと思う。</p> <p>現在公立、私立の学校(小、中、高)では、文科省の指針が出され、部活動のあり 方が見直されている。</p> <p>高専における取り組みは、どのようになっているのか教えていただきたい。</p>	<p>・教員の負担軽減は高専においても主要なテーマであり、平成29年5月に高専機 構から「部活動及び寮における業務の適正化に関する指針」が出され、部活動の1 日あたりの活動時間数や週当たりの休養日、必要な部活動数等について各校とも 見直しを行うよう求められているところです。本校では、各クラブに対し、本指針に 基づき活動を行うよう指導しています。また、部活動(クラブ・同好会)数の削減にも 取り組んでいます。</p>

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

評価項目 1 教育に関する事項 (3) 優れた教員の確保

通し番号	項目	事前コメント	回答
1-(3)-①	<p>・多様な背景を持つ教員の採用のために、公募制を取ったが、今回は、選考委員会を開催したものの採用には至らなかつたことある。今後、公募制を取るとあるが、今回の反省点と今後への改善点があれば教えていただきたい。</p>	<p>・公募に際する応募資格は十分に考慮された条件ですが、今後の教育、研究や社会連携、国際交流への取り組みに対応した教員を確保できるように、改善していきたいと考えています。</p>	
1-(3)-④	<p>・女性教員を積極的に採用するとある。今年度の女性教員の採用実績はどのような状況であったか教えていただきたい。また、女性教員比率の実績と目標比率があれば教えていただきたい。</p>	<p>・今年度の教員採用実績はありませんでしたが、選考過程において、面接審査時の女性候補者は全6名中3名でした。女性教員比率は70名中3名(4.3%)であり、目標比率は、一般事業主行動計画において、新規採用教員に占める女性の比率を、専門学科20%以上、全体で30%以上となっています。</p>	
1-(3)	<p>・本学の財産である「優れた教員」を持続的に確保していく上で、社会的な課題とも言える「教員の働き方改革」に対する取り組みも必要かと思われませんが、何かしら実践されている施策等があまりありませんら説明をお願いします。</p>	<p>・昨年度から、教員の業務負担軽減を目的として、学生寮の宿直業務を担当する職員3名と、学生のクラブ活動を指導する課外活動指導員9名を非常勤職員として採用しています。</p>	

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

評価項目 1 教育に関する事項 (4)教育の質の向上及び改善のためのシステム

通し番号	項目	事前コメント	回答
1-(4)-①		<p>「授業力アップアクティブイ」の取り組みと学内FD研修会の実施とある。教員相互の授業参観を実施し、教務委員会、教員集会で情報共有を行い、今後の実施方法や改善点について検討していくことになっているが、具体的には、教育の質向上にどう結びつけるのか方向性があれば教えて欲しい。</p> <p>アクティブラーニング推進のための研修として取り組んでいることがあれば教えていただきたい。</p>	<p>・近年、高専機構全体として、「教育の質の保証」が話題となっています。これは、高専卒業時の学生のレベルが「ある一定を保つことを保証する」と意味しており、モジュールカリキュラム、CBT、Webシラバス等を用いて、全国の高専全体として取り組みが行われています。</p> <p>本校では、教員の教育力向上を目的として、教員間の授業視察(授業参観)を行い、結果を情報共有して分析し、授業担当教員へ感想や改善点を伝えています。今後、教員の教育力向上を図っていく、「教育の質の保証」へ繋げていきたいと考えています。</p> <p>・アクティブラーニングについては、教員が通常の授業の中で取り入れているケースは存在します。(演習、グループワーク、ペアワーク、ディスカッション等)</p>
1-(4)-②		<p>資料4の表で選外者がいるというのは、インターシッピングの枠が不足しているということか？マッチングの問題なのか？</p>	<p>・選外者の応募先は、いわゆる大手企業がほとんどで、本校からも複数名が申し込みを行っているケースが多いです。一方、全く参加申込みのない企業も多いため、どちらからという学生が選択するマッチングの問題かと思われれます。</p>
1-(4)-②		<p>・インターシッピング参加者を増やす取り組みを行い、その成果が上がっていることは、喜ばしいことであると思う。</p> <p>・参加者が増加することとなった具体的な切っ掛けは何があったのか。その理由が分かれば教えて欲しい。</p>	<p>・はっきとした理由は明確にはなっていませんが、考えられる理由としては、 ①年々インターシッピングが注目されるようになり、学生の認知度や参加意欲が高まったため。②担任からの積極的な働きかけなどが考えられます。</p>

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

評価項目 1 教育に関する事項 (5) 学生支援・生活支援等

通し番号	項目	事前コメント	回答
1-(5)-①	1-(5)-①	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援を要する学生等の実情について教えて欲しい(人数、具体的対応策、その後の経過、卒業後の進路等)。 ・カウンセラーによるカウンセリングと臨床心理士によるカウンセリングの利用者から見た違いはどのようところか? その実績、評判はどうか? 	<ul style="list-style-type: none"> ・保健室登校を認めた学生:3名 (具体的支援として、保健室登校中は欠課にならない、配慮依頼文書の配付、出身校との連携、専門家によるカウンセリング、休館室の確保) (2名は自分の適性を見出し進路変更。1名は在籍。) ・カウンセラー(教員、教員OB)への相談は、修学面に関する相談が多く、進路についての情報や勉強方法を、具体的にアドバイスして欲しいと考えているようである。臨床心理士への相談は、精神面に関する相談が多く、自身の心境を語ったり、近況を話しながら、自身の気持ちや内面の事を考えているようである。 ・H30年度実績:カウンセラー14件、臨床心理士94件。カウンセラー・臨床心理士ともに、考え方を示唆されたり、気持ちをコントロールする方法を一緒に考えてもらい、自分で答えを見つけていく学生も多いようです。
1-(5)-①	1-(5)-①	<ul style="list-style-type: none"> ・メンタルケアに力を入れていっていることだが、生徒が充実した学校生活を送るためにも迅速かつ、きめ細やかな対応が必要。親元を離れて寮生活する生徒も多いので、しっかりとサポートしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本校では、学生の異変を察知した場合は、担任・部活動顧問・保健室看護師が直ちに3主事や学生何れでも相談室長、学科長等に報告・相談を行い、対応について検討することとしています。特に、学生寮においては、寮母・舎監が学生の日常生活に密接に関わっているため、当該スタッフからも異変について報告があります。また、寮と保健室は保健室来訪者や授業欠席者の情報を日に一回相互共有し、心身に問題が生じた学生の有無を把握するようにしています。
1-(5)-②	1-(5)-②	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価がAではなくA'とされた理由は? ・学生への経済的支援につき、学校独自のものを検討するよちはあるのか? また、その必要性についてはどう考えているのか? 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価をAとした理由は、1月に評価を行った時点では完了していなかった取り組みがあったためです。(3月6日・合格内定者登校日にJASSO奨学金制度概要や資金計画に関する説明会を実施すること) ・学校独自の経済的支援制度については、学生・教員から特段の要望は寄せられておらず、検討を行っていません。
1-(5)-⑤	1-(5)-⑤	<ul style="list-style-type: none"> ・女子寮のリニューアルが実現することは、女子の入学希望者にとって大きい。寮の設備は安全面や機能面など適宜、見直しているとのことだが、今後も勉強に集中でき、快適な生活が送れるよう改善に努めてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・既存の第一志学寮(現男子寮)の女子寮へのリニューアル工事では、共有スペースを取り入れたシェアハウス型を採用し、寮生間のコミュニケーションを促進させるレイアウトで設計を計画しています。 ・魅力的な女子寮にリニューアルすることで、女子入学希望者の増加を図り、受入れ増に対応できるよう、寮室数を確保した整備を実施してきます。 ・今後においても、寮生の要望を広く取り入れ、より快適に生活できる環境を整備していく予定です。

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

評価項目 1 教育に関する事項 (6)教育環境の整備・活用			
通し番号	項目	事前コメント	回答
	1-(6)-①	<p>・男女共同参画に関する情報通知や講演会実施だけでなく、その次の段階の具体的取組がなされていれば詳しく教えて欲しい。 例えば、育児や介護と仕事との両立についてはどのような制度があり、その利用実績はどうなっているのか？</p>	<p>・育児休業に関する規則、介護休業に関する規則は、機構規則として短時間労働や部分休業等について定められています。昨年度の利用実績は、職員2名が育児休業を取得しています。</p>

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

評価項目2 研究や社会連携に関する事項

項目	事前コメント	回答
2-(1)-①	<ul style="list-style-type: none"> ・科研費の採択件数が過去3年平均の半分以下になった要因は何か。 ・全教員応募は他の高専や地方大学等では実現しているのか。 ・採択可能性のある教員への支援をより充実させるべきではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・科研費申請については、科研費講演会・研究発表会・査読等を行い採択に向けた取組を行っています。今年度は実を結びませんでした。採択件数が減少した要因は明確にはなっていませんが、全国的に科研費への応募が増加していることも一因と考えられます。 ・科研費申請については、申請しない理由を確認すると共に、研究費を削減(申請者には5万円配分)しましたが、全教員の申請には至らなかった。九州内の高専では全教員申請している高専(研究テーマの見つけられない教員へのフォローを行っている)もあり、当該高専の取組を参考に検討を行い、本校でも全教員申請を目指します。 ・科研費採択に向け、限られた予算、時間の中で、様々な取り組みを行っています。その効果も検証しつつ検討を進めていきます。
2-(1)-②	<ul style="list-style-type: none"> ・外部資金の受け入れ総額は大型の研究助成の有無で変動が大きい。科研費、共同・受託研究、受託試験、奨学寄付金の件数で、活性度を測るべきではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ご指摘のとおり外部資金の受け入れ総額は、大型の研究助成の有無で変動が大きくなります。科研費、共同・受託研究、受託試験、奨学寄付金の件数で活性度を測ることも検討します。
2-(1)-②	<ul style="list-style-type: none"> ・外部資金獲得の実情について教えて欲しい(どこから、どのような端緒・過程を経て、どのような金額を獲得しているのか)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外部資金獲得は、科研費(文部科学省・日本学術振興会)や研究助成金への応募によるもの、企業との共同研究・受託研究、企業等からの寄附金、コンクリート受託試験等の受託試験料等が主なものです。 平成30年度の獲得額は、94,376千円(H30年12月末現在)です。
2-(2)-①	<ul style="list-style-type: none"> ・researchmapは、研究者の双方向のコミュニケーションを実現した日本の研究者総覧と標榜しており、研究者の「名刺」と例えられている。 ・教員個々の研究業績を登録することが、研究成果発信に繋がるか疑問。 	<ul style="list-style-type: none"> ・researchmapは研究者の双方向のコミュニケーションの場ではありませんが、研究業績を個々の高専が独自に管理するのは非効率であるため、高専機構がresearchmapを利用して研究業績を管理しています。 ・researchmapに確実に研究業績を登録し、それを本校ホームページとリンクさせることにより、研究成果発信に繋げていく予定です。
2-(2)-①	<ul style="list-style-type: none"> ・リサーチャマップに80名が登録されているが、さらなる活用のためには、顔写真は不可欠であろうと考えるかいかか。 ・加えて、リサーチャマップの存在をさらに広める必要がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・リサーチャマップへの顔写真の掲載は任意であり、プライバシーの問題もあるため強制できない現状があります。 ・前述のとおり、本校ホームページとリンクさせることにより、researchmapの存在をさらに広めていく予定です。
2-(2)-②	<ul style="list-style-type: none"> ・「今年度は技術移転が可能な研究成果や発明等はなかった。」との記述は、実用化に結びつかないような研究ばかりであったと解釈されかねない。「研究成果や発明等を技術移転に結びつけることができなかつた。」と表現すべきではないか。 ・「技術移転可能な研究成果等の発掘」の記述も同様に、実用化に結びつかないような研究が大半との印象を与える。 ・保有特許の技術移転に関しては、発明を自ら実施することのない学術機関が特許を保有するという場合は、実施許諾され活用されるものであることが前提条件であることを念頭に置くべき。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ご指摘のとおりです。発明等届の提出が年間1・2件しかないため、研究成果や発明等を技術移転に結びつけることは難しい状況です。 ・技術移転に関してもご指摘のとおりです。本校では実用化を目指している研究も行われています。 ・保有特許の技術移転に関してもご指摘のとおりと考えます。それも含め、保有特許をどのようにしたら技術移転へ繋げていくことができるのか大きな課題です。

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

2-(2)-②	<p>・時代のニーズに即したテーマであれば、さらに利用が広がることを認識して、さらなる成果普及に努めていただきたい</p>	<p>・一つの手段として、KTCの技術研修会等により企業と教員の交流を更に進めることで、技術移転可能な研究成果や発明等に繋げていければと考えています。</p>
2-(3)-①	<p>・COC+の目的とする地元定着促進のためには、県内企業への就職が直接的だが、教育課程での地域の課題を取り上げた研究課題の設定や、地元企業との共同研究を通じた県内製造業への理解促進も、地元定着の下地作りとして有効ではないか。</p>	<p>・ご指摘のことも一つの有効な手段と考えており、一部、実施しています。</p>
2-(4)-①	<p>・産学のマッチングの工夫は何かされているのか？</p>	<p>・一つの手段として、今年10月に第5ブロック(九州沖縄地区)で高専企業振興会サミットを開催する予定です。</p>
2-(4)-②	<p>・退会等の要因を分析し、対処しなければならぬが、ホームページを活用するなどにより、KTCの活動成果をより広く周知してはどうか</p>	<p>・KTC会員に対しより魅力ある取組を実施することにより、退会企業の減少に努めていこうと考えています。また、KTCの活動等については、本校ホームページに掲載しています。</p>

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

評価項目3 国際交流に関する事項

項目	事前コメント	回答
3-(1) 3-(2) 3-(5)	<p>・学生の海外派遣や受入、国際シンポ参加等を積極的にに行っていることは評価できているが、その貴重な経験や成果を他の学生や学校全体にとっても有益なものとするための取組・工夫があれば教えて欲しい。</p>	<p>・海外からの学生受入の際、可能な限り多くの学生と交流を持たせるために、様々な学年の授業に組み入れていきます。また、海外に渡航した学生は報告書を作成して高専祭で発表を行うことで、他の学生に海外での経験を伝える機会を設けていきます。</p>

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

評価項目 4 管理運営に関する事項

通し番号	項目	事前コメント	回答
	4-(1)-①	<p>・校長裁量経費について定められた規程があり、運用されているのか？ 限られた資金の中で、モチベーションを向上させようという強い意志の表れであるが、5万円の価値(額や荣誉等)が明確であるか？</p>	<p>・校長裁量経費についての規程は無く、当初予算配分時に校長を中心に運営会議において運用方針を決定しており、学会への参加費や旅費及び新任教員スタートアップ経費など研究活動に対し重点的に配分を行っています。 A判定獲得者に配分する5万円は、モチベーションを向上させる等の報奨的な意味合いは無く、また、採択に向けての申請準備を行うための資金であり、研究を推進させるものではありません。</p>
	4-(2)-①	<p>・経費節減についての具体的に検討している取組があれば教えて欲しい。</p>	<p>経費節減について様々な取組を行っておりますが、一例としましては下記のとおりです。 ・印刷の際はモノクロ印刷を原則とし、複合機の保守経費を節減 ・事務部各課において定時退庁日を設け、光熱水費等を節減 ・廊下やトイレの照明を人感式とし、電気料金を節減 ・体育館照明や外灯をLED化して電気料金を節減 また、九州大学が中心に九州地区の大学及び高専の電力を一括で契約することになり、本校もこれに参加し、平成30年8月の契約後、前年度比で16%減の約400万円削減の見込となっています。さらに電話回線を光回線に変更し、対前年度比で40%減の約90万円削減の見込です。</p>
	4-(2)-①	<p>・努力して取り組まれていると評価するが、運営に支障をきたさないよう、窮屈にならないよう配慮いただきたい</p>	<p>・ご意見ありがとうございます。今後も運営に支障をきたさない範囲で経費削減に取り組んでいきます。</p>
	4-(4)-①	<p>セルフチェックの結果、問題があった案件への対応等について報告が必要と考える</p>	<p>・セルフチェックは、機構が教職員に遵守すべき事項を示し、教職員に理解を求め、自身で確認を行うものです。セルフチェック自体で問題が生じることはありません。</p>
	4-(4)-②	<p>・高専相互の内部監査での指摘事項の内容は、確認事項であっても今回のような外部評価の機会に詳細を報告して明らかにすべきではないか。</p>	<p>・事務処理のモレやミスで、いわゆる不正行為といったものではありませんでしたので、詳細は記載しませんでした。</p>
	4-(4)-④	<p>・情報セキュリティに関するチェックについて、抜き打ち検査等外からのチェックを検討する必要はないか？</p>	<p>・高専機構事務局のセキュリティに関する対応訓練が毎年実施時期を明らかにせず、教職員全員を対象に抜き打ちで行われます。加えて3年に1回、高専機構事務局のセキュリティ監査を受けるようになっております。</p>

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

4-(4)	<p>・高専機構が作成・配信したものを利用した取組はなされているようだが、もう一步突っ込んだ本校独自のマニュアルを作る等の取組は検討できないものか。何となく上部組織に頼っている印象。</p>	<p>・自己点検・評価報告書に記載した事項については、全高専統一の対応が必要であるため、高専機構が作成・配信したものを利用した取組を行っています。</p>
4-(4)	<p>・不正行為等が発生しにくい環境整備が求められていることから、今後も検討を進めていきたい また、ハラスメントに対する対策や早期対応が可能となるような仕組みも必要である。一方で、規則を遵守しない学生等に対する対応については、一定のルールのもとで適切に対応できるよう、取り組んでいきたい(意図しないマスコミ等からの取材攻勢等があっても、的確に対応できるようにする)</p>	<p>・公的研究費に関する不正が発生しないように、今後もガイドラインに沿った取組を継続していきます。 ・ハラスメントに対する対策や早期対応が可能となるような仕組みとして、現在定められている本校の規則や、相談員の体制等について、学生、教職員に積極的に案内をしていきたいと考えています。 ・違法行為や迷惑行為を起した学生については、学生委員会で事実・経緯等を調査し、懲戒及び指導を行っています。学生の不祥事に関する突発的な取材に対してどのような対応をとるかという点については、本校「危機管理マニュアル」に報道対応の手順が示されており、本マニュアルに基づき、対応を取ることとしています。</p>

平成30年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

その他ご意見等

通し番号	項目	事前コメント	回答
-	-	<p>・保護者対応について最近スクールロイヤーの設置を検討している所も多いと聞きますが、本校や機構での議論の状況は？</p>	<p>・スクールロイヤーの活用については、現在、機構からは特に示されておらず、また、本校でも議論されていません。必要な場合は、個別に弁護士と相談に出向きます。</p>
-	-	<p>・中途退学者は年間何人いるのか、その理由は？</p>	<p>・過去2年間の途中退学者(本科生)は、以下のとおりです。 →H27:13名(進路変更(11名)、留年2回(2名)) →H28:16名(進路変更(13名)、留年2回(1名)、就職(2名)) →H29:12名(進路変更(9名)、留年2回(1名)、就職(2名))</p>

第2部

平成30年度 外部評価報告書

平成30年度外部評価委員会委員名簿

外部評価委員

役職名	氏名
第1号委員 長岡技術科学大学前学長	にいほら こういち 新原 皓一
第2号委員 鹿児島県教育委員会 教育委員 株式会社島津興業 取締役 相談役	しまづ きみやす 島津 公保
第3号委員 鹿児島県工業技術センター所長	にしもと けんりょう 西元 研了
第4号委員 鹿児島高専テクノクラブ会長 (株)九州タブチ 代表取締役社長	つるがの みお 鶴ヶ野 未央
第4号委員 鹿児島県中小企業団体中央会会長 小正醸造株式会社 代表取締役社長	こまさ よしふみ 小正 芳史
第5号委員 (株)南日本新聞社 霧島総局長	のぐち しょういち 野口 正一
第6号委員 霧島市長	なかしげ しんいち 中重 真一
第6号委員 鹿児島高専同窓会長 (株)相良製作所 代表取締役社長	さがら まさよし 相良 正典
第6号委員 笹川法律事務所 弁護士	ささがわ みちこ 笹川 理子

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則（一部抜粋）

（組織）

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

平成30年度外部評価委員会委員出席者名簿

外部評価委員

役職名	氏 名
第1号委員 長岡技術科学大学前学長	にいほら こういち 新原 皓一
第2号委員 鹿児島県教育委員会 教育委員 株式会社島津興業 取締役 相談役	しまづ きみやす 島津 公保
第3号委員 鹿児島県工業技術センター所長	にしもと けんりょう 西元 研了
第4号委員 鹿児島高専テクノクラブ会長 (株)九州タブチ 代表取締役社長	つるがの みお 鶴ヶ野 未央
第4号委員（代理出席） 鹿児島県中小企業団体中央会 専務理事(兼)事務局長	ながた ふくいち 永田 福一
第5号委員 (株)南日本新聞社 霧島総局長	のぐち しょういち 野口 正一
第6号委員 笹川法律事務所 弁護士	ささがわ みちこ 笹川 理子

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則（一部抜粋）

（組織）

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

平成30年度外部評価委員会出席者名簿（鹿児島高専）

校 長		丁子 哲治
副校長	教務主事、(自己点検・評価委員会委員長)	須田 隆夫
副校長	学生主事	塚崎 香織
副校長	寮務主事	野澤 宏大
副校長	専攻科長・研究担当	山内 正仁
副校長	国際交流・地域連携担当	塚本 公秀
機械工学科長	*三角 利之学科長代理で出席	田畑 隆英
電気電子工学科長	*井手 輝二学科長代理で出席	樫根 健史
電子制御工学科長		宮田 千加良
情報工学科長		幸田 晃
都市環境デザイン工学科長		堤 隆
一般教育科長		松田 信彦
事務部長		安部 功一郎
総務課長		城戸 啓介
学生課長		畠 俊洋
技術長		山下 俊一

平成30年度鹿児島工業高等専門学校外部評価実施要領

1. 趣旨

鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価について、外部の有識者により本校の教育・研究活動等の評価、助言を受ける。

2. 評価方法

外部評価は、鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価報告書等に基づき、教育・研究活動等について行う。

委員会終了後、各委員に外部評価結果について、報告書の提出を依頼する。

3. 外部評価委員

- | | |
|------------|---------------------------------|
| (1) 新原 皓一 | 長岡技術科学大学前学長 |
| (2) 島津 公保 | 鹿児島県教育委員 株式会社島津興業 取締役 相談役 |
| (3) 西元 研了 | 鹿児島県工業技術センター所長 |
| (4) 鶴ヶ野 未央 | 鹿児島高専テクノクラブ会長 (株)九州タブチ 代表取締役社長 |
| (5) 小正 芳史 | 鹿児島県中小企業団体中央会会長 小正醸造(株) 代表取締役社長 |
| (6) 野口 正一 | 株式会社南日本新聞社 霧島総局長 |
| (7) 中重 真一 | 霧島市長 |
| (8) 相良 正典 | 鹿児島高専同窓会長 株式会社相良製作所 代表取締役社長 |
| (9) 笹川 理子 | 笹川法律事務所 弁護士 |

4. 外部評価日時

平成31年3月18日(月) 14:00~17:00

鹿児島工業高等専門学校 大会議室(管理棟2階)

5. 事前配付資料

- (1) 平成30年度自己点検・評価報告書(確認用を含む)
- (2) 平成30年度 学校要覧

6. 日程

- | | |
|-----------------------------------|---------------|
| (1) 開会 | (6) 質疑応答 |
| (2) 校長挨拶 | (7) 外部評価委員打合せ |
| (3) 委員及び本校出席者の紹介 | (8) 講評及び閉会 |
| (4) 委員長選出 | |
| (5) 学校概要・特色及び平成30年度 自己点検・評価報告書の説明 | |

平成30年度外部評価委員会日程表

1. 日 時 平成31年3月18日(月)
14:00~17:00
2. 場 所 鹿児島工業高等専門学校 大会議室 管理棟2階
3. 会次第
 - (1) 14:00~14:45
 - ① 開 会
 - ② 校長挨拶
 - ③ 委員及び本校出席者の紹介
 - ④ 委員長選出
 - ⑤ 学校概要・特色、平成30年度 自己点検・評価報告書の説明
: 副校長(教務主事)(30分: パワーポイント等)
 - 【14:45~15:00 休憩】
 - (2) 15:00~17:00
 - ⑥ 質疑応答(70分)
 - ⑦ 外部評価委員打合せ(40分)
 - ⑧ 講評及び閉会(10分)

鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則

(設置)

第1条 鹿児島工業高等専門学校（以下「本校」という。）に外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第2条 委員会は、本校が行った自己点検・評価結果等について検証を行い、本校の教育・研究等の改善に資することを目的とする。

(組織)

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

(委員の委嘱)

第4条 委員の委嘱は、外部評価委員会の開催に合わせて、必要な期間行うものとする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

(報告書と公開)

第6条 外部評価を行ったときは、報告書を作成し、公開するものとする。

(運営)

第7条 委員会の運営については自己点検・評価委員会が行う。

附 則

- 1 この規則は、平成16年5月21日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初に第3条に規定する委員となる者の任期は、第5条の規定にかかわらず、平成18年3月31日までとする。
- 3 鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会要項は、廃止する。

附 則

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

7. 外部評価委員会議事録 (一部要約)

～開会 校長挨拶～

【丁子校長】

皆さま、どうもありがとうございます。委員の先生方には、ご多忙中本校のためにお集まりいただき、どうもありがとうございます。

本校もいろいろと、外部評価委員会、年に1回開催させていただいています。毎年毎年どれだけ本校が成長しているかは、疑問なところもありますけれども、精いっぱい、全教職員一丸となって、さらなる育成のために努力をしているところです。厳しく評価いただき、また来年度に向けて頑張りたいと考え、お願いしてございます。

季節も、先週の金曜日に卒業式がございました。卒業式となると、この地は本当に春めいてきて、そろそろ桜の開花もニュースになるようなときになってきました。ちょっと心がうきうきしていますけれども、そこら辺もぐっと引き締めて、厳しい評価をいただきたいと思っていますので、本日は一つよろしくお願ひします。

～学校概要・特色の説明～

【須田副校長（教務主事）】

※次ページ以降のプレゼン資料を参照

～自己点検・評価報告書の説明～

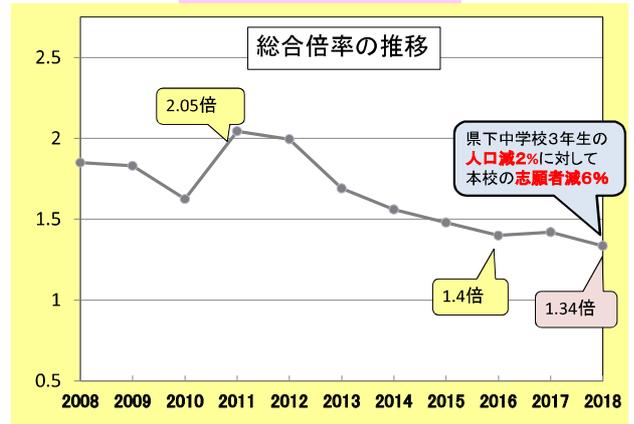
【須田副校長（自己点検・評価担当）】

※次ページ以降のプレゼン資料を参照

1. 学校概要

中学生、保護者向け
学校説明会の資料より

本校の最大の課題
志願者確保!



平成30年度 入試志願者数

科	定員	推薦選抜			学力選抜			志願者 合計	合格者 数	倍率
		志願者	合格内 定通知	A-C	志願者	倍率*1	合格内 定通知			
		A	B	C	D(A-C)	E	F(E/D)			
機械工学科	40	14	14	26	40	1.5	28	54	42	1.35
電気電子工学科	40	18	18	22	38	1.7	24	56	42	1.40
電子制御工学科	40	10	10	30	23	0.77	31	33	41	0.83
情報工学科	40	26	24	16	42	2.6	18	66	42	1.65
都市環境デザイン工学科	40	12	12	28	46	1.6	31	58	42	1.45
合計	200	80	78		189		131	267	209	1.34



所在地：霧島市隼人町



高専(高等専門学校)とは

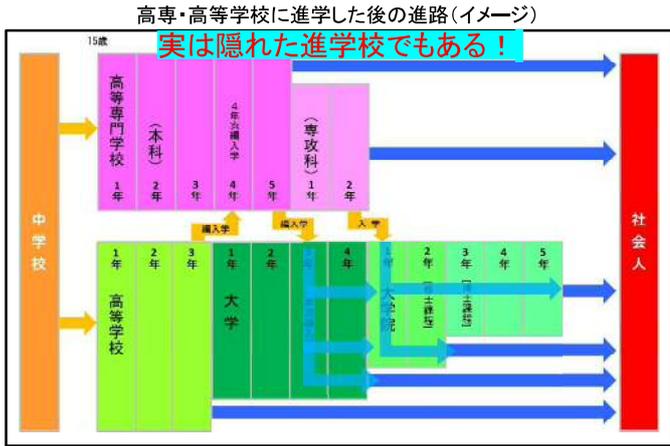
- 技術者を志す人たちのための高等教育機関
- 高等学校から大学卒業までのレベルの教育課程を5年間一貫で学習
- 充実した設備と少人数教育

大学と同等の高等教育機関に分類される。後期中等教育の工業高校とは目指すところが違う

<高等教育機関の種類>

- 高専 (本科卒業) → 大学
- 高専 (専攻科修了) → 大学
- 大学 → 大学
- 短大 → 短期大学士

学校制度



高専から大学に進学もできるので、将来の選択肢が幅広い! 7

鹿児島高専の学習・教育到達目標

養成すべき人材像として以下の学習・教育到達目標を掲げています。

1. 人類の未来と自然との共存を目指す技術者
2. グローバルに活躍する技術者
3. 創造力豊かな開発型技術者
4. 相手の立場に立ってものを考える技術者

技術者(エンジニア)
 これまでにないモノを開発・設計する
 技能者(テクニシャン)とは異なる職種

「技術者」とは、設計・開発・監督など複合的に絡み合う課題に対処する人たちのこと

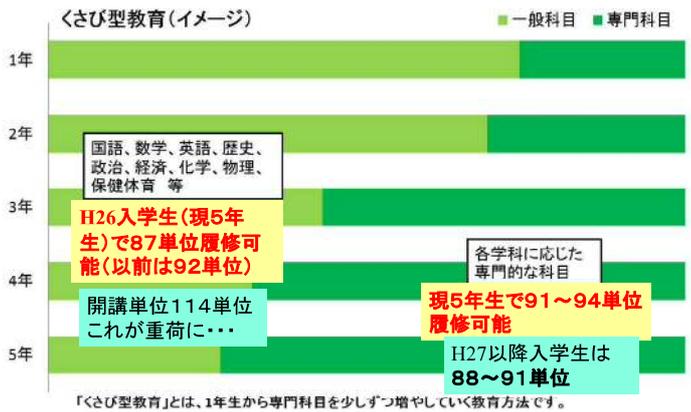
入学者の受け入れ方針(アドミッションポリシー)

本校の学習・教育目標に共感し、この目標達成にふさわしい素質と能力のある人を受け入れます。特に次のような人を求めています。

- ① 論理的な思考ができる人
- ② もの作りが好きな人
- ③ コミュニケーション能力のある人
- ④ 21世紀の世界を支える技術者として、大いに活躍したいという夢のある人

プレゼンテーション能力から変更

高専の「くさび型教育」



学科で学ぶ内容が違

各学科の専門科目は、全学科共通の応用科目と各学科独自の専門科目から構成されています。各学科独自の専門科目から構成されています。各学科独自の専門科目から構成されています。

インターンシップは「工場実習」の科目名で実施
 参加学生が、H28より急増!
 参加学生/4年生の割合

H27	48%
H28	75%
H29	76%
H30	86% (資料4)



4年生の夏休み期間を利用して、実際に企業の業務を体験できる「インターンシップ制度」があります。全員が参加できるわけではなく、企業を体験できる番号が限られています。

機械工学科

Department of Mechanical Engineering

○機械工学科が目指すエンジニア

「ものをつくる」ための機械工学の基本と幅広い専門知識を学び、様々な産業分野で活躍できる広い視野と実力を備えた創造性ある実践的なエンジニア。



学生寮



寮生数 平成29年4月1日現在

寮生数	1年	2年	3年	4年	5年	専攻科	計
男	130	114	116	79	54	4	497
女	18	16	11	9	5	0	59
計	148	130	127	88	59	4	556

寮生数 平成30年4月1日現在

寮生数	1年	2年	3年	4年	5年	専攻科	計
男	136	113	100	95	39	4	487
女	15	18	15	7	2	2	59
計	151	131	115	102	41	6	546

日課	日課時間表
起床	◎7:00
点呼・体操	◎7:10~7:20
清掃	7:20~7:40
朝食	◎7:20~8:20◎
登校閉寮	◎8:30
昼食	◎12:00~13:00◎
開寮	14:25
入浴	◎16:30~19:50
夕食	◎17:30~19:00
点呼	◎19:55
自習	◎20:00~23:00 ※◎21:20~22:00◎ は休憩を含めた行為も可
点呼	◎23:00
消灯	24:00

◎はチャイム

学校行事

H29より全学科統一の工場見学旅行はとりやめた。
学科により夏季休業中に実施



5月 対都城高専親善試合



4月 入学式



4月/1月 クラスマッチ



7/8月 高専体育大会



10月 高専祭(文化祭)



10月 高専祭(体育祭)



10月 高専ロボコン九州大会



3月 卒業式

課外活動

本校には、20の体育系クラブと同好会、15の文化系クラブと同好会があります。

	体育系	文化系
クラブ	<ul style="list-style-type: none"> ■硬式野球 ■バスケットボール ■バレーボール ■剣道 ■空手道 ■柔道 ■卓球 ■陸上競技 ■弓道 ■サッカー ■水泳 ■ソフトテニス ■テニス ■バドミントン ■合気道 ■ハンドボール ■極真空手 ■ラグビーフットボール 	<ul style="list-style-type: none"> ■写真 ■吹奏楽 ■英語 ■軽音楽 ■エコラン ■メカトロニクス研究 ■電子・情報・システム研究 ■将棋・囲碁 ■環境創造物理研究 ■航空技術研究 ■建築研究
同好会	<ul style="list-style-type: none"> ■フットサル ■ストリートバスケット 	<ul style="list-style-type: none"> ■ピアノ ■天文気象 ■美術・イラスト・漫画 ■数学

※約8割の学生が課外活動に参加しています。

※3年生までは高校総体に、4、5年生はインカレに出場できる競技もあるほか、大学生の中に高専生として参加している大会もあります。

高専ロボコン2017

(アイデア対決ロボットコンテスト)

2018の競技テーマは
Bottle-Flip Cafe(ボトルフリップ・カフェ)
ネット上で人気の「ボトルフリップ」というスゴ技にロボットが挑戦。1チーム2台までのロボットが自陣の8つのスポットに向かってペットボトルを投げ、ピンをこよく立たせる競技。

惨敗!

デザイン賞受賞(Bチーム)
特別賞受賞(Bチーム)

過去大会実績

年度	九州沖縄地区大会	全国大会
2014	技術賞(Aチーム)	出場(Aチーム)
2013	特別賞(Bチーム)	出場(Bチーム)
2012	技術賞・特別賞(Bチーム)	出場(Bチーム)
2011	優勝(Aチーム)、準優勝(Bチーム)	ベスト8(Aチーム)

2017年 九州大会の様子

本年度5年生の進学状況(9月末)

卒業生 183名
在籍189名 休学4名

就職予定者数 107名
(57.8%)

進学予定者数 78名
(42.1%)

延合格者数は99名
推薦は48名(62%)

大学・高専専攻科進学先 (H29年度)	進学者数
鹿児島高専専攻科(推薦21)	35
熊本大学 (推薦4)	5
九州工業大学 (全て推薦)	13
鹿児島大学 (推薦4)	18
九州大学 (推薦1)	2
大阪大学(工・基礎工)	3
豊橋技術科学大(推薦1)	3
宮崎大学 (推薦1)	3
長岡技術科学大学	1
筑波大学	1
北海道大学 (推薦1)	1
広大・理、千葉大、山口、佐賀、岡山、北九州市立	6

本科卒業後の進路(H29年度)

卒業生数 193名
就職者数 124名 (64.2%)
求人倍率: 20.2倍

進学者数 66名 (34.2%)

※進学者への進路
主な進路先
延合格者数は86名
推薦は43名(65%)

その他 3名(1.6%)

※国立大学への編入が多い!
※編入学なので入試のチャンスは多い!

大学・高専専攻科進学先 (H29年度)	進学者数
鹿児島高専(専攻科)	27
熊本大学	9
豊橋技術科学大学	8
九州工業大学	7
鹿児島大学	5
九州大学	2
筑波大学	2
電気通信大学	2
東京農工大学	2
東京大学	1
長岡技術科学大学	1

合格は10名

入学試験 <推薦選抜> 平成31年1月19日(土)

- ・推薦枠：各学科20名程度
- ・推薦基準：(1)または(2)の条件

推薦枠の拡大
16→20

推薦基準	中学校又は中等教育学校前期課程における3年次の1～2学期9教科5段階評価の総計	その他
(1)の条件	74以上	推薦基準の緩和 -2点
(2)の条件	70以上	生徒会長・生徒会副会長経験者や部活動等で優秀な成績を収めた者

※平成28年度入学者推薦選抜試験より作文と工学適性検査は実施していません。

31

入学試験 <学力選抜> 平成31年2月17日(日)

- ・募集人員：各学科40名
【推薦によるもの(20名程度)を含みます。】
- ・試験科目：4科目
理科、英語、数学、国語
- ・試験時間：各50分
- ・配点：500点満点
数学200点、他教科100点

※平成29年度入学者学力選抜試験より、面接(集団)が導入されました。
※平成28年度入学者学力選抜試験より、解答方法がマークシート方式(OMR)となっております。

【過去問題掲載場所】

「高専機構 入試」で検索して、

<http://www.kosen-k.go.jp/examination.html>



32

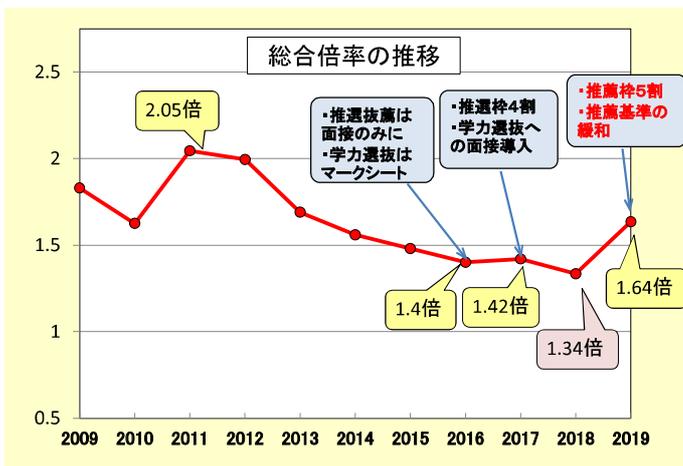
エンジニアへの夢を実現するそれが高専です。

- 電気・燃料電池・自動運転次世代カー(日本の基幹産業の一つ)
- 次世代エンジン
- ロボット(高専ロボコン、ETロボコン)
- ドローン
- 鉄道(主な就職先の1つです。)
- 携帯
- 電子部品(日本の基幹産業の一つ)
- 衛星・国際通信
- 太陽光発電、次世代電池
- 環境をデザイン
- コンピュータ、IoT、人工知能、量産型ロボット
- ネットをウイルスから守る
- 橋のデザイン
- 高速道路・都市をデザイン
- ロケット・宇宙開発

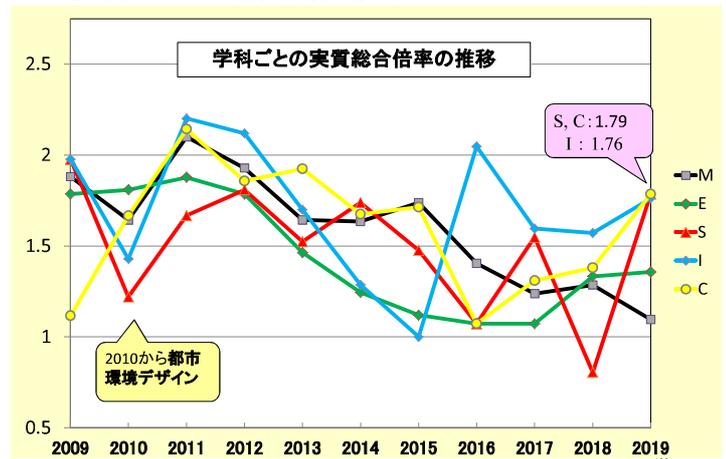
中学生の皆さんへ
をご覧ください

2. 志願者確保について

34



学科ごとの倍率推移(2009~2019)



36

地区別志願者数の推移

地区	28年度			29年度			30年度			31年度		
	推薦 (合格者)	学力 (合格者)	合計 (合格者)									
鹿児島地区 (鹿児島市・日新・いちご 串木野・十島村等)	19	99	115	16	82	97	30	89	119	36	109	140
南薩地区 (指宿・枕崎・新さつま 等)	5	6	11	4	7	11	3	7	10	13	9	19
北薩地区 (薩摩川内・阿久根・出水・さつま町等)	9	22	30	9	16	27	6	20	25	9	9	18
始良・伊佐地区 (高島・始良・伊佐等)	21	84	85	35	70	104	28	48	75	34	84	115
大隅地区 (新原・志布志・肝付・南大隅等)	6	26	31	14	23	37	9	10	19	14	9	22
熊毛地区 (種子島・豊久島)	2	1	3	2	0	2	2	0	2	4	2	6
大島地区 (奄美・徳之島・与那)	1	0	1	1	0	1	1	0	1	0	1	1
私立・市立中高 一貫校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
県外	2	0	2	2	0	2	2	1	3	2	1	3

県全体で志願者が伸びているわけではない。地区で偏り
 ・北薩は減少
 ・大隅地区は回復していない
 同一地区でも、急増した中学校もあれば変化のない学校も

平成30年度 一日体験入学 参加者状況

参加申込状況 * 8/4現在

学 科	体験コース					その他 (保護者等)	合計
	M	E	S	T	C		
人 数	63	87	90	140	75	3	458
うち男子	(58)	(70)	(86)	(108)	(47)	(2)	(371)
うち女子	(5)	(17)	(4)	(32)	(28)	(1)	(87)
進学相談	10	14	21	24	18	2	89
履修 (保護者のみ)	44	55	58	98	54	0	309
保護者等	56	77	73	107	53	6	372
要 求 (生徒・保護者)	82	106	104	174	96	0	562

過去の参加申込数
 H29 412名 (申込時)
 10月実施時 247名
 H28 372名
 H27 413名

- 参加申込総数は458名で対前年比**11%増**
- 当日参加者数は448名(10名の欠席)であった。
- 保護者等の参加申込372名(H29 申込294名) 対前年比**26.5%増**と、大幅に増えている。
- 女子の参加者割合はやや増加。(H30:19.0%, H29:15.5%, H28:15%)
- アンケート結果から「**高専を知ったきっかけ**」 「保護者から」が**36.7%**と群を抜いて多い(H29 31.2%) 「**上級学校説明会等**」が**12.2%**と**激減**(H29 24.3%)

入試広報活動
資料1

3. 本校の特徴的な取り組みについて

高専機構内の選択的(競争的)な事業

- グローバル高専事業(展開型) H28~H30
 ⇒ 第5ブロック(九州・沖縄)拠点校
- 研究推進モデル校 H29~H30
 ⇒ 第5ブロック(九州・沖縄)拠点校
- KOSEN4.0イニシアティブ H29~H30
 ⇒H29に申請96事業のうち37事業採択
 H30は不採択(新たな申請78事業の内34採択)

高専機構のモデル・コアカリキュラム推進に向けた実践校

- KOREDA 活用に基づく教育改善スキームの構築

グローバル高専事業(展開型) H28~30

目的: 学生・教職員の英語力向上に効果的なプログラム開発を行うこと。

大学間連携共同教育推進事業「九州沖縄地区9高専連携事業」(H24~H28)で培った、国際交流、海外インターンシップをさらに発展させる。

- (1) 学生が、海外の学生・研究者及び企業の技術者と、英語を用いて意思疎通がスムーズにできるようになるための英語コミュニケーション力向上
- (2) 学生の英語力強化のための教育プログラムの開発。
- (3) 学生の国際・異文化理解をより深めること。
- (4) 英語による授業を行うこと。
- (5) 教員及び職員のグローバル化に関する意識向上を進め、英語による教育研究力の強化を図ること

教育に関する事項 1-(2)①、④、⑤
 国際交流に関する事項 3-(1)①、②、3-(4)、3-(5)

英語インタビュー活動	近隣大学の留学生あるいは英語が堪能な地域住民の協力により小グループ体制で英語インタビューを実施する。また、本プログラムでは海外留学経験者や短期留学生の活用も考えられる。学生の意欲向上のために、英語の成績に一部反映させる。
英語による外国人学生の日本語インタビュー活動	TV会議システムを利用して、海外協定大学で日本語を学ぶ学生に対して、英語と日本語を交えたインタビュー活動を行うことにより、高専生の英語によるコミュニケーション力増進の導入の効果を狙うプログラムを実施する。
実践の英語での指導	近隣大学の専門学科在籍の留学生等の協力を得て、英語による実践実習指導を実施する。また、海外の大学教員を講師として招へいすることも計画する。
On line 英語講座受講	H28年度は、希望する教職員を対象にOnline英語講座を開講し、校内の施設(空き教室、PC等)を利用して1名あたり10回のレッスンをそれぞれ授業の時間に受講できるように整備した。H28年度中に第5ブロック内で希望のあった6高専への波及も実現したため、H29年度は講座の内容を選択できるようにし、各教職員の英語力にあった講座を受けられるよう調整を進める。
校内英語キャンプ	H28年度は校内の施設を利用して本科1年生を対象に英語キャンプを実施した。4時間を英語のみで過ごす一連のプログラム(学生10名前後を1グループとする)を、5日間20グループに分けて実施した。H28年度の実施において生じた課題等を整理し、H29年度はより良い状況で実施できるよう整備する。その上で、第5ブロック高専への波及、共同開催等を模索する。
校内英会話放送	H28年度は校内放送を用いて、毎日英会話放送を流す。実際の聴取の効果よりも、英語が日常にある雰囲気を作ることを目的とする。
TOEIC受験	英語力向上の一つの指標とし、本科3年次の到達目標400点、本科卒業時450点を目標とする。専攻科2年次では520点、さらに上位20~30%が550点以上の高得点を目標とする。
授業のe-learning取り入れ	H28年度は専攻科入学予定の3年生を中心にライセンスを配布し、授業外での自習教材として試験的に取組を始めた。H29年度はカリキュラムへの導入について模索し、第5ブロック内高専への波及も併せて行う。
英語での発表活動	専攻科特別研究の中間発表、本発表を英語で実施し、海外で開催される国際会議での発表も目指す。本プログラムはブロック内高専と連携して行うことにより効率化を図る。
校内掲示物等の英語化	表を含めた高専キャンパス内の案内表示や高専紹介出版物を英語表記する。これにより海外からの留学生、研究者の招聘の円滑化を図れる。

長期インターンシップ可能なカリキュラムの整備	専攻科においては沖縄高専で開発されたモデルを導入し、各セメスター単位でのカリキュラム構成とし、長期インターンシップに取り組みやすい環境とする。本科においては、出席要件の緩和、TV会議システムあるいはe-learningによる授業受講の仕組みを導入する。第5ブロックでは、H29年度から校時の完全統一が合意されていることから、ブロック内高専への波及を目指す。
「国際・異文化理解」科目の導入	宗教、地理、歴史、風俗習慣、海外事情、国際協力、国際援助活動、海外渡航の知識などを講義する科目をカリキュラムに導入する。H28年度は風俗習慣及び海外事情を内容の一部として授業を実施し、従前からある「世界史」及び「現代社会」の科目にて海外事情について取り入れる等の取組を実施した。H29年度も継続して取り組み、第5ブロック内高専との情報共有を図りながら内容の充実を目指す。
英語で実施する科目の導入 (平成28年度より実施)	英語の授業は基本的に英語で実施し、専攻科科目の一部を英語化することを目標とする。専門科目では、まず講義の1、2回を英語化し、次にテキストを英語化し、さらに講義そのものを英語化するなど、段階を踏んで実施していく。本科においては、練習問題を英語化し、専門用語の英語習得、実験を英語化、などさまざまな取り組みを各科目で段階的に実施する。 H28年度は英語の授業の大部分を英語で実施するだけでなく、授業内で学生がスピーキングやライティング等、英語でアウトプットを行う機会を増やした。 H29年度も継続して取り組み、第6ブロック内高専との情報共有を図りながら内容の充実を目指す。

* 海外学術協定校、インターンシップ派遣、学生交流 等の実績データ
⇒ 資料7 p.17, 18

43

【教員】

外国人教員の増強	H28年度に外国人教員を1名採用し、今後の拡充を図る。
協定校派遣	春季・夏季休業を利用して海外協定校に派遣し、 ・研究交流の促進、 ・授業テキスト開発、 ・授業参加 などで、英語による研究力向上、英語での授業能力向上を図る。
語学学校派遣	海外の英会話学校に派遣あるいは、Online英会話受講により語学力の向上を図る。H28年度は9高専で計82名の教職員が10回のOnline英会話講座を受講し、この取組はH29年度も継続する。
機構主催の各種研修派遣	H28年度は教員3名が機構主催の英語力向上に関する研修に参加した。H29年度は、教員1名が国立高等専門学校教員グローバル人材育成力強化プログラムにより1年間の研修に参加する予定である。H28年度のグローバル高専事業の取組の中でこうした長期の研修を希望する教員が出てきたことは、校内のグローバル化への意識高揚のあらわれと言える。
研究成果の英語による発表	研究成果を国際会議で発表、英語による論文投稿等を積極的に図る。

44

Computer Based Testing (CBT) の目的

平成30年度から本格実施するCBTは、以下の二点を目的としている。

① 学生の学習効果の検証

学習者個人の弱点を特定し、学生本人が弱点の補強を自律的に行うことができるようにする。

② 授業・カリキュラム改善の指針

学年／クラスにおける強み弱みの傾向をMCCの到達目標に基づいて把握し、授業改善やカリキュラム改善を行う上での指針として活用できるようにする。

いずれにしても、**学校間での比較のために用いるのではなく、目の前の学生の成長のために資するものとする。**

高専機構の説明文より

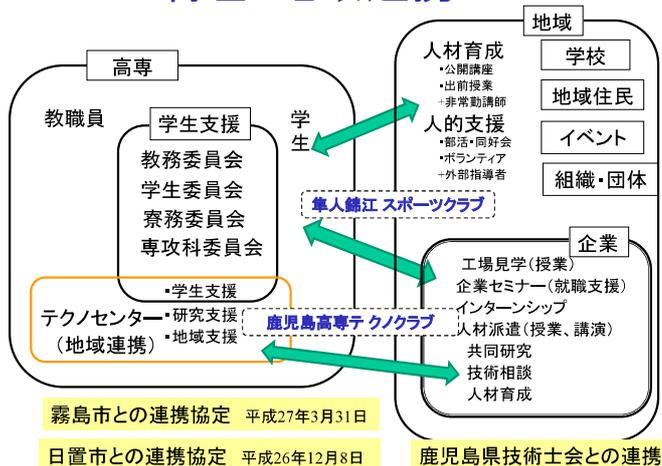
CBTの概要

H30年度のCBTの概要

CBT実施時期	・一般科目(数学、物理、化学):2018年10月1日~2019年1月31日 ・専門科目(実施科目未定):調整中(決定次第、別途通知)
対象校	全国立高専
受検単位	クラス単位(40名程度)
CBT科目(学年)	・一般科目(数学、物理、化学) 数学:学習進度に応じて、 3学年分 の対象学年を学校で決定する。 物理:学習進度に応じて、 最低1学年分 の対象学年を学校で決定する。 化学:学習進度に応じて、 最低1学年分 の対象学年を学校で決定する。 ・専門科目(実施科目未定。決定次第、別途通知)
受検範囲	P4~6のとおり。専門科目については、決定次第、別途通知
受検時間	数学50分、物理50分、化学30分(説明10~15分程度)
出題数	数学25問、物理25問、化学30問
受検形式	Bbを用いたCBT形式(パソコン等が必要で)

補足:本実施はH30年度第2回役員会・第1回企画委員会(2018/04/23)にて報告済

特色:地域連携



鹿児島高専テクノクラブ(通称KTC)

主に南九州地域の有志企業が、地域との連携強化を理念の一つに掲げている本校と相図って、産学官交流組織「錦江湾テクノパーククラブ」を平成10年3月に設立。総会、技術研修会、企画イベント等を実施。平成28年4月1日に「鹿児島高専テクノクラブ」に改名。

会員企業:87社(平成31年3月1日現在)

特別会員:16公的機関

(鹿児島県商工労働水産部、鹿児島県工業技術センター、かごしま産業支援センター、鹿児島市、霧島市等)

(資料6)

隼人錦江スポーツクラブ

- ・平成15年4月、鹿児島高専と旧隼人町(現霧島市)が提携して設立した**総合型地域スポーツクラブ**である。
- ・平成18年1月、地域住民(会員)が主体となったクラブ運営を目指し、NPO(特定非営利活動)法人化。
- ・霧島市公共体育施設の指定管理者として、**隼人体育館・武道場・弓道場・温水プール等7施設**の管理・運営を実施中。
- ・平成19・20年、鹿児島高専と「学生支援GP」を共催、**指導者データベース**(約260名登録)の構築等。
- ・鹿児島高専体育施設を活動拠点の一つとして、現在12講座に約850人の会員が活動中。

～質疑応答～

【新原委員長】

今まで、高専からいただいた資料または説明いただきましたこと等に関しまして委員の皆さま方からご質問、ご意見があれば伺いたいと思います。そのご意見・ご質問を受けて、高専側から回答を得たいと思っています。時間の都合もありますので、委員1人当たり質問時間は3分程度とさせていただきます。それに基づいて高専側からの回答をいただきたいと思います。今回は、これもまた事情がありまして、教育と研究を中心にするという形で進めていますので、ご了解よろしくをお願いします。もちろん他のことに対していろいろなご意見をお伺いすることもあるかとます。

では、早速質問に移らせていただきたいのですが、委員長を仰せつかっています新原は最後に質問させていただきますので、よろしくをお願いします。

それでは島津委員から、最初によろしくをお願いします。

【島津委員】

私も、もう4年目になりまして、だいぶ高専のこともいろいろ勉強させていただいて、理解は少しずつですができてきたと思います。

この外部評価の関係でお話をさせていただきますと、今、一応概略はお話をいただいて、現状を理解はできたのですが、外部評価ということで考えたときには、できれば今目指している方向性というか、その辺を評価の視点も含めてですけれども示して

いただいて、それを経年で追っていくような形のほうが外部評価という面では評価もしやすいし、それから評価される側としても方向性が付きやすいのではないかなと思っています。

それで、私ども県の教育委員会の関係で申し上げますと、県は5年ごとに教育振興基本計画というのを作ってまして、これは1枚ペーパーで、これに詳細項目があるわけです。これに県の5年間の方向性というものを、五つ分野を作って、いわゆる規範意識をどう教育していくのかとか能力をどのようにして高めるのかとか、そういった5項目の方向性があるって、それに基づく施策が35項目ぐらいつらっと続いているわけです。一応全35項目を毎年自己評価という形で、自分たちで評価しているのと、その中から教育委員として評価するのを毎年10項目ずつぐらいピックアップして、それについて詳細に評価していくという形を採っていますので、本当はそういう形のほうが分かりやすいのかなと思います。

毎年、人事に関する面とか教育に関する面とか評価項目を出していただいていますけれども、その方向性が少し見えなところがあります。どういうところをゴールにしているのかというところが少し見えないので、なかなか評価しづらいところがあります。項目として挙げていただいているところについては、こういうことをやりました、こういう結果になりました、ここが足りなかったですという結果報告を、自己評価でしていただいている、それに対してのわれわれの意見という形にはなりますけれども、全体像とそれから経年という形のほうが、より分かりやすいかなと思ったと

ころです。

あとは、具体的にいうと、教育の観点の事項でいえば、事前に質問もさせていただきましたが、授業力アップアクティビティーのことです。今、アクティブラーニング等ということを言われていますので、この辺への取り組み、もう少し具体的に教えていただけるとありがたいというのが1点です。

それから今日のテーマとは若干ずれてしまうのかもしれないですけども、今言われていることとして働き方改革が求められています。全国的な意味合いでそういう動きになっているわけですけども、高専としての働き方改革への取り組み、その辺が今どういう形で進められているのかということも教えていただきたいと思います。それに関連して、いわゆる部活動を、これも教育委員会レベルでいうと文科省が方向付けを出して、例えば平日は2時間とか、土日は3時間とか、それから週2回は休まないといけないとか、そういうことで部活動の方向付けが行われているのですけれども、高専の場合はその対象に入るのかとか、その辺も教えていただければと思っています。

以上です。

【丁子校長】

まずいわゆる学校の方向性といいますかそういったものは、先ほどの説明はどうしても志願者対策が気になるところで非常に重点が大きくて、その辺の説明が主だったと思いますけれども、実際には高専は独立行政法人化になってちょうど15年目になりますけれども、高専機構の本部としては

5年ごとにそういう目標を掲げて、今年は第3期の最後の年、来年度からは第4期になります。その辺は、今、機構本部とも調整しながらしているところだと思いますけれども、大きくは、方向性はもちろんございます。ということで、先ほどのいろいろな本部の事業としてKOSEN4.0イニシアチブというようなことで、第4期の方向性を鹿児島高専として求められています。それは須田先生の方で少し説明していただこうと思いますけれども、そういうことです。1つ目の働き方改革ですけども、高専もいろいろと教職員が多忙・繁忙ということで、実際にはかなり労務関係が大きいというようなことで、特にご指摘のような部活動です。部活動も高専としての部活動は何のためにあるのかということの議論も、今までも少しは、議論はありますけれども、もっともっと議論しておかないといけないのかなと思いますけれども、実際に先ほどのロボコンの紹介にもありましたけど、ロボコンの指導というのは、いわゆる技術系の話ですけども、教員の本職の専門分野の範囲内で上手にやっていかなきゃいけないと思いますけれども、運動部は、みんながみんな体育の教員以外は基本的には専門外ですので、それが専門となると本当の専門は何なんですかと逆に問わないといけないところですので、今の高専機構としては運動部のコーチを外部からそういう指導にたけた人を近く地域のいわゆる外部コーチとしてそういう予算付けもしていただきながら、できるだけ先生は引率程度というような負担に調整をしていければなど、まだ負担感を持っているというのはいるようですけども、そんな調整を

しています。

本来やらなければいけないことは、そこに重心を置くということで、私はこういう言い方をしているのですけれども、部活動をやらなくても、寮に入らなくても、卒業はできるのですから、本来卒業できなくなるようなあるいは授業の単位を取るとかそういうことで単位が取れなくて困っている学生をしっかりと指導するというところに時間と労力を掛けないといけないのではないかなということ。その部分を含めて働き方改革の中でといっても部活動が高専にとって不必要とは思いません。学生にとっては非常に大事なことです。本当は全員運動部に入ってもらいたいぐらいです。でも、卒業予定には入っていませんので入らなくても構わないぐらいのスタンスでやっていかないといけないのかなという考え方をしています。

【須田副校長（教務主事）】

一つ、授業力アップアクティビティーとか、アクティブラーニングの件、ご質問にありましたけど、もともと授業力アップアクティビティーという、単に授業参観をするのではなくて、その授業に入って行って、そこで具体的にどういう点がいいとか悪いとかそういうところをきちんとあとで議論しようという活動で、やはりアクティブラーニング、もともとはアクティブラーニングの何か試行をやった先生のところへ行ってどういう点がいい悪いというところを議論しましょうということで始めたのですが、まだ私はこんなにやっていますよという人があまり多くなくて、どちらかというと誰か学科等決めてもらって、その人の授業を

また何人か指名した人が行って、見て、こういう点が良かった悪かったという話をし、こういうふうに変更したらいいだろうということを書いたレポートを書いてもらいます。当初はそれをまた情報共有をしていろいろなところ悪いところを役立てようという予定だったのですけれども、なかなかそこまで行っていないという状況です。

それと FA 研修というのをやっています、本年度ですと実際にアクティブラーニングの試みをやっている先生とかにお話をさせていただいて、それは非常に皆さん参考になると言われています。だから、うちの場合は次の一手といいますか、何かやるのですけれども、それを実際に次の実践に生かして、それをさらに検証するというところまでなかなか行き切っていないところが問題かなと思っています。

これはよそに責任を持ってはいけませんけれども、例えば機構からモデルコアカリキュラム校に指定されて、それにどれだけカリキュラムが対応しているかというのを全部チェックしなさい、そして先ほど紹介しました CBT できちんと、パソコン室がありますからどこのクラスはこの時間のいつと全部スケジュールを決めて実習をしてと、そういうことがあとからあとから入ってくるものですから、なかなか初めこちらがやろうとしていたところを次の一手までもっていく余裕がなくなってしまうと、実際にそういう形でなかなか取っ掛かり、アイデアとしては授業力アップアクティビティーとか、それをどういふふうに変えていくの改善に生かすかというところは良かったのですけれども、残念ながら、それを、フィードバックをして生かす

というところまでは至っていないというのが現状です。

【西元委員】

初めて高専の外部評価ということでお引き受けいたしました。こういう工技センターの方は当て職ということになっているようで、今年初めてになるので力加減が分からなくて、書き過ぎた部分もありましたらすみません。工業技術センターは非常に近いので、先生方とも非常に良くしていただきまして、学生さんもよく工業技術センターで試験をしたり、日頃お世話になってますとお礼をまず申し上げておきたいと思えます。

私、評価の中では研究・社会連携のところを中心ということを事前にお伺いしていただきましたので、書かせていただきました。今日の話で須田先生から教育の受験者の話を中心にしていましたけれども、一つだけ私からお伺いしたいのですが、高専の主目的というか社会で活躍できる技術者を育てるとするのが大事だとしておりますので、その成果をどうやって測るのだろうか、卒業生がどんなにして社会で活躍しているというのを実際中学生の方にも教えてあげると、恐らく受験者が増えるのだろうと。高専ということをごんなに社会で役立って活躍できるのだよというのが、具体的にイメージできると中学生も高専に行ってみようという気になるのではないかと思いました。では、実際、活躍している様子をどうやって測るのという非常に難しい問題になったなと思えます。逆にいうと、高専を出てどのような活躍をしてほしいのかというのを、イメージできているのかなというもある

ように思います。どこかの大企業に勤めて開発の部門で何か開発しているイメージ、あるいはそこからまたスピンアウトして独立してベンチャーでも立ち上げているというイメージ、いろいろあると思うのですけれども、具体的に先輩方がいるのかいないのか分かりませんが、そういう卒業生をたどって行って、こんな具体例もありますよというのをいくつか見せてあげるといいのかなと思いました。そういう取り組みができるのかどうかというのを、必要性とのつながりという点で教えていただければありがたいです。

二つ目は、事前質問票に書かしていただきましたけれども、特許の話が出てきて、高専で機構継承という特許 9 件がありますと出てきていました。私は知らなかったものですから、高専の先生方が特許を出されてそれを出願して保有するという仕組みが、どんな仕組みでそれぞれの先生方が出願されてそれが機構に保有されているのかというのを教えていただきたいという、その 2 点です。よろしくお願ひします。

【須田副校長（教務主事）】

はじめの質問の回答です。先ほど少しお話ししましたが、JAXA に就職したりとか三菱重工に入ってロケットに実際に携わったりだとか、そういうところはある程度情報をつかんでいるのですけれども、そのあと、例えば独立して何かをやったりというのは、地元でやってらっしゃる方は情報入ってきますけど、なかなか情報をつかみきっていません。恐らく同窓会ではある程度つかんでいるとは思いますが、そちらとわれわれが綿密に連携しているという

ところが少し弱いのかもかもしれません。こちら側から同窓会に誰かを紹介してということを経験に依頼しているかということではない、何かの折にうちのOBで活躍している人はいませんかみたいな調査をするんですけれども、そんな範囲です。

高専全体を見ると、ベンチャーをやっている人とか、コロプラの社長が悔しいですけど隣の都城高専出身です。そういう方もいらっしゃる。だから、少し幅を広げるといろいろなモデルケースが紹介できるかと思えます。ただ、そういう人に来てしゃべってくださいというのは機会が今のところないという状況です。

それと、特許等に関しては、恐らく高専機構との関係だと思えるのですけれども。発明した場合、本校で発明委員会というところで話をし、最終的に企業内での特許と同じで高専機構として特許の所有という形になるのかどうかというところを話してからという2段階ぐらいを踏まえないといけないと思います。

【丁子校長】

われわれの教員の知財は、みんな職場発明ということで全て機構の所属になって、あと産業界との共願ということであれば、その持ち分によって判断をします。その判断は、各学校の知財委員会に任されていて、これは知財ですと報告すると、機構本部で、それを継承していただけるという手続きになります。実際に特許が下りたら機構本部の知財として登録されるという段取りになります。

実際に教員だけの単願となると、これは実際にどこが使うのかというような、そ

の知財を譲渡する相手企業を探さないといけない、知財をそのまま持つていくのは高専の場合は許されません。大学も同じはずです。共願で産業界と一緒に出した場合は、その産業界が実際に実用化して使わないといけない。もし使わないとなったら、また機構が出てきて他社に譲渡する手続きを取りなさいというような、その事例は見たことがありますけれども、基本的にはそうして行って、高専の先生方が取った知財は使ってそこから利益を上げるというところまで持っていかないといけないのです。そして、特許料のそういう利益は学校に還元をしてくれるというような手続きになります。

実際に知財の申請料は機構本部が負担をしているのですけれども、これは年間数千万円になっていて、あまり大きすぎるので特許料としてうまく還元できるような、先ほど言ったように実際に実用化して企業さんに使っていただいて、利益が出るというものでないと各校で知財として認めてはいけませんよというのが最近お達しとして出てきているようです。以前は特許にさえなれば良いと言って出していたところもありますけれども、実際使われる役に立つ特許でないと特許申請をできるだけ控えるようにという話になってきています。

卒業生の活躍ですけれども、これはなかなか高専では難しい、個人情報の問題で、学校が卒業生を追いかけることができないことになっています。ですから、卒業時にどこに、就職先は在学中に分かりますけれども、そのあと企業に対してどこの職場になったのですかということを追いかけることができなくなっています。卒業式の名簿

も名前だけで、就職先は書いてはいけないという縛りがあります。

だから、そこら辺は、みんな同窓会をお願いしないといけないのです。同窓会は縛りがございませんので、同窓生の中で情報交換して、卒業生の動向というのは同窓会からデータをいただかないと分かりませんし、ただいただいても活用して何かに使うというのも難しいことになっています。同窓会も実際にはネットワークで連絡を取り合うことはあまりできていないようなので、先生が同窓会に出たときに、お互いに顔を合わせて今どうしてるというような、そういう口コミ情報で集めているという現状です。

本校の場合は東京方面に就職している人が多いので、東京支部で活発にそういう同窓会をやっておられるようで、そこで得た情報は、この辺りで就職して活躍している同窓生の中に、昨年開校記念日に講演していただいた〇〇本社の常務をされている△△さんという方が、「彼は一番の出世頭」と言って、□□の執行役員をされている××さんから紹介いただいてというように、これも同窓会で会って、「そんなふうになっているの？」ということで情報をいただいたという具合で、網羅的に情報を集める方法はいろいろ制約があってできない状況です。

【鶴ヶ野委員】

評価委員会のみならず、KTC であったり、あるいは COC+、そういった活動にも、どちらかという、もう一緒になって参加させていただいていまして、いろいろな実態を知れば知るほどなかなか評価も難しいと思ってきました。どちらかという、

もう評価される側になってしまっているような感じもしまして、立場的に非常に難しいと思っています。

質問ということで、事前質問もさせていただいたので、私から特に質問は考えていませんけれど、実はもうこの 1 月、2 月ぐらいに鹿児島県内の高等学校の志願者倍率を見たときに、一番目の行くところが高専で、県内の高校の志願者倍率が大きく低下というよりも、もう定員割れしている学校が、多分私が数えていくともう 7 割ぐらいは定員割れしていた印象だったのですが、そんな中で今年は、本校に限っては倍率が増えたということで、非常に大健闘されたという印象を持っています。先ほどの説明ではまだまだ分析等々不足しているということですが、やはりこれは学生側からしたニーズをしっかりと汲んでその倍率につながったというのが一つあると思います。学校の先生方を含め、今度入ってくる 1 年生を含め、もう少し分析をして倍率の上昇の原因をつかまれたらいいのではないかと思います。

一つの今回の評価報告書を見て、少しだけ気になっているところが実はありまして、今、学科の再編というところに高専機構にも相談されながら検討していますという項目がありまして、今の 5 学科を再編していくということであれば、当然これから学生さんが入ってくるニーズを受けてとか、あるいは地域社会のニーズを受けてとか、さまざまな要求される項目を受けて 5 学科を再編して何らかの形へ改組・再編されていくのだろうと思います。その辺のニーズとか要求事項というのは、どんな形でも受け止められて将来的にどうされようと

しているのかというところが、まだ書けないから書いていないのだろうと思いますが、その如何によっては、また大きく先ほどの入り口のところにもつながってきますし、もちろんわれわれみたいな民間企業から見た高専の良し悪しというところにもつながってきますし、その辺は少し教えていただければなと思います。

鹿児島県というのは、特色があって、今、農業だ、畜産だ、あるいは観光だと言っているのですけれど、鹿児島にある高専ですから、その辺のところに関連付けられているのかなと思います。特に農業といっても、今は昔ながらの農業ではなくて、農業の工業化だったり、これはもう ICT とか AI とか IoT とか今なりの言葉でいえばこんな技術なくして今後の農業はあり得ないというぐらいの時代になってきていますので、そういうところへの関連もあるのかなという想像はできます。その辺を少し教えていただきたいなと思います。以上です。

【丁子校長】

実際の学科改編の話のその前に、確かに委員がおっしゃるようにニーズはどうなっているのかということですが、なかなか現状のニーズを永田さんのところにもお邪魔したりして、いろいろと調査をし、それから福岡まで行って九経連に南九州の実態はどうですかとか、いろいろな調査をしました。

現状は、高専生を受け入れていただける企業はそんなに多くはないということで、やはり県外就職を求めてしまうことを、あまり止めることができない状況にあるということも言っている、どうなのかなとい

うようなところで、そういったジレンマに陥っているところです。今、学科改編をして、新しい学生を受け入れて卒業する、そういうところまで含めると、ざっと 10 年近く先になってしまいます。それで、今、現状のニーズというものをアンケート等によっても 10 年後は予測はできないのではないかとということで、特に九経連の研究所の方にいろいろと相談をして、確かに今おっしゃるような農業関係、これはやがてはサイエンス型農業とおっしゃっていましたけれども、いろいろな科学技術を持ち込んで、市場としては国内ばかりではなくてやはり海外まで農産物の市場を求めていくということで、実際には長島町で、長岡技大の先生方が取り組んでいることもあったり、そこに科学技術、それから種子島でも安納芋に関して京都大学の先生が取り組んでいたりと、そういう意味でいろいろな工学系の先生方が大学で取り組んでいる事例があります。これは高専でも同じことができなければいけないのではないかと、そういう課題を見つけながら地域でそういうことを一つ一つつくりながら、そこで鹿児島県の農業に高専の科学技術を使える時代になるように技術をつくりあげていく、そういうようなことをやっていかないとはいけません。現状でも、今、畜産関係でも共同研究している先生も少しずつ出てきています。そういうものを拡充して、なおかつ学生がそういうところに興味を持つようにするには、どんな教育が必要なのかということ想定しながら、考えたのが、教務主事から説明のある方向性ではないかということで、今、機構とも調整しながら、文部科学省に承諾をもらわないと改組できませんので、そうい

ったような内容になって、データはある程度持って説得材料にしようとしています。

【須田副校長（教務主事）】

的確なデータがずっと出てこないのですが、この辺りは昨年も少しご紹介したのですが、KOSEN4.0 イニシアチブという現在やっている事業です。結局そこでは最終的に、今後の社会で求められる、どちらかというといノベータティブな人材をどういうふうな教育で育成するかというのが一つのテーマで、そこで考えたのが、ICT 関係、情報関係、これはもう全学科統一的にやりましょう、基礎教育もそうです。応用という点から考えると、これまでの学科の枠組みではなくて、こういうロボティクスであるとか環境であるとか生体情報であるとか、応用的な複合・融合的な枠組みでカリキュラムを組み立てたらどうかというのがスタートであります。

では、それどういうふうにするかというときに、現在の教員の研究で、やはり研究となるとどうしても旧来の単独の分野ではなくて、やはり応用というところになりますから、現在本部の教員を研究というところでロボティクス系とか情報生体系とか、環境系とか、そういうふうにグループを分けて、そこで上から卒研とか特別研究とかそういうところから少しやっつけよう。そして、国際交流といいますか、グローバル高専とも関連しますけども、海外の研究機関とか大学とかそういうところともコネクションを付けて、独りよがりじゃなくてきちんと世界的にはどういうレベルが通用するかというところをきちんとチェックしていきましょう、そういう構想です。

では、改組というのはどうというのは、先ほど校長から話がありましたけれども、現在、研究グループで、改組によって志願者増であるとかこういうところを目指しましょうというところで、取りあえず先ほどのアイデアから、カリキュラムに落としてみました。これも私がつくってみた状態ですけども、こういうふうな構想で共通的なことを教えて、そして学年が上がるに従って専門性が高くなるのですけれども、これまでの機械とか電気とかいう枠組みじゃなくて、機械ロボティクスというような枠組み、情報とか生体工学という枠組み、エネルギー・環境という枠組み、こういうふうな新たな枠組みでカリキュラムを組み直すことができないかということなんです。

ここまではいいですけども、先ほど鶴ヶ野委員からもありましたように地元のニーズです。地元のニーズとどう結び付いているのかというところで、今のところ確実にこれがどう地元のニーズと結び付いているのかをきちんと示せる資料とか証拠とか、われわれはまだ十分に見られていないというところでペンディングの状態です。この辺もわれわれの活動が、KTC の皆さんに、本当に高専の技術者としてどういうものを望むのかという、本当の意識調査といいますか話もあまりしてないというところも問題があります。その辺りのニーズをもっときちんと調べて、そして落とし込んでいくということをやらなければなりません。今のところまだこのレベルで完成ではないペンディングという状況です。

【丁子校長】

結局こういうニーズのところの就職口が

ないのでしたら、新しく会社つくったらどうとアントレプレナー教育を高専も充実すべきだという意見も、最近聞こえてきました、そういうことも可能ならば学生時代に一度地域の KTC の会員さんとのインターンシップと行きながら、やがてはそういう企業等の支援をいただきながら実際に起業してはどうかというような話もありますので、10年後ぐらいにはそんな時代がまさに来るかもしれません。そんなようなことも含めて考えていければと思います。

もう一つは、先ほども卒業生の動向の話が出ましたけれども、地元に戻りたいという卒業生がいるのではないかと、これも学校は手も足も出せません。ハローワーク業務はしてはいけないことになっています。これも同窓会さんが仲立ちをして、そういった方々と学校との環境をうまく使えば、鹿児島に帰ってきたいという卒業生がまたこういう実際に実務でやっておられる方が戻ってくれば、またそれも一つの地域経済の活性化につながるのではないかと、そういうことも今後やっていくべきではなかろうかと。以上です。

【永田委員】

今日の説明の中で、応募者が非常に少なくなってしまった、それに対してどう対応するのかということの説明の中に編入という制度があるということにもものすごく力を入れて説明をされていらっしゃいました。あれを聞いているときに、福岡カレッジ・オブ・ビジネスというのが最近非常に宣伝をしていて、2年間一生懸命資格を取りなさい。そのあといい大学に編入できますよというのをうたい文句に頑張っています。

あそこを目指しているのという違和感を感じてしまったということです。

校長先生とかから以前に聞いたお話では、技能者を育成するのではない、自ら考える技術者を育成するのだというようなお話を聞いていたものですから、その部分というのは、やはり高度な技術を持ってこれがどういう分野に活用できるのだということをもっとアピールすべきだろうと思いましたが、それが十分ではないのではないかと考えたのが、電子制御学科が非常に少なく、情報工学科が多いというお話でしたが、多分今の技術の中では、組込みソフトウェアの需要というのが今後ますます増えるだろうと、であれば、その部分の要となる電子制御について、もっと人が入ってしかるべきだろうと、その PR はあまり十分ではないんじゃないかというのを感じたところです。

そういう思いはしましたが、先ほどカリキュラムの説明をされている中で、IT、IoT、ICT この辺りがベースになりますというお話はされました。それはよく分かります。では、どの程度 ITSS スキルの 3.0 もしくは 4.0 の学生を輩出されたかということが非常に気に掛かります。少なくとも IPA の試験の中の応用技術者の合格者、これが何人ですよというのが高専の書類の中ではほとんど見えてこなかったように思います。応用技術者まで取っていると、あとのもっと上のクラスはかなり楽に資格が取れるようになるし、それがステータスになっていくわけです。その部分について少し、カリキュラムについては資格が全てというわけではないですけど、資格を持つことによって上をさらに目指そうという姿勢が出

てくるのではないかと思って、そういった部分も力を入れていただきたいと感じました。以上です。

【須田副校長（教務主事）】

大学編入が少し予備校みたいになっていると話をしましたけれども、あくまではじめに申しましたように多様な進路がありますと、だから行き止まりではないですというつもりです。ただ、実際に4割ぐらいが進学していますので、その実態をきちんと、しかもどういうところに行けているかということを中心にきちんと知ってほしいというつもりで紹介をしています。実際6割の人間が就職していますので、この5年間で完成教育というのが高専の基本的なベースですので、そこは崩さないつもりです。

それと、ここでのICTとかIoTというのは、もう本当のベースで、今、これに関連して電気電子とか情報以外の学科でもできるような導入実験実習といいますか、そういうものの開発をやってもらっています。情報とか電子制御の専門家でなくても、例えばWi-Fiモジュール持って来て、それでプログラミングをして、スマホでコントロールといいますかりモコンみたいなことができるとか、それはそういうことができます、こういう世界がありますということをまず知ってもらおうということです。だからあそこのベースというのは、そんなにレベルの高いところを目指しているのではなくて、ICT、IoTということは、もう全ての学科で基本的な知識は持たないといけないので、それである程度分かるような内容をまずやりましょうということになります。そして、電子情報系というところで上に上がっ

ていくときちゃんと深いところまでやっています。資格については、現在電気電子それから制御も当然情報もそうですけれど、情報処理技術者の資格に関しては勉強して取りなさいという指導はしています。ただ、合格者の数に関しては、私は把握しておりません。

【幸田情報工学科長】

例えば情報処理技術者試験のいろいろなランクがありますが。情報ができた当初は、これも取らせなければいけないということで、夏休みもカリキュラムを組んだり、教員全員が一生懸命やっていました。でも、やっていると学生が授業の一環だという受け取り方をして、自主性がどんどんなくなってきたので、すばっとやめました。でも、やめて学生がどんどんやるかということでもないので、現在はまだぶり返してきています。授業でやっていることをちゃんと理解していれば取れます。それ専用に授業をやるのではなくて、今、1年生から3年生までの教室の後ろに過去問とか、とにかくアピールすることはもう数年前から一生懸命やっていますが、なかなか伸びません。実際は情報処理の基本情報の辺りは3年生、4年生で3人ぐらいが通っているという状況で、実際に通っている学生に対して何もやっていなかった学生が、どんな試験が出たのと興味は持っていますが、自分で願書を出して受験しようというところまでは伸びていないというのが現状です。強制的にやらせるのではなくて、自主的にやらせるというところが、いろいろこちらの動き方もぶり返しながらかやっていて、なかなかいなくて数名というのが現状です。

【永田委員】

基礎で数名というのは、多分ものすごく低いです。

【幸田情報工学科長】

低いです。ほかのいわゆる情報関係を売りにしている高校とかに比べれば、もう全然です。レベル的にはうちはもう全然問題はないですけど、アピールはするんですけど興味がないです。

【永田委員】

応用技術者のレベルで卒業生を輩出していただけるとありがたい。

【幸田情報工学科長】

われわれでも取れないような、10年前ぐらいに5年生が1回取ったりもするんですけど、レベル的にはもうと思います。それも言っています、就職する前にと言っていますけど、やはり念仏になってしまっています。どうやったらいいかというのが、火をつけるところが大事だということは分かっているのですけど。

【丁子校長】

補足説明になりますけれども、今、委員がおっしゃったようなことは、実は非常に難しいことで、何が難しいかと言いますと、高専というのは、どういう学校種ですかと問われて、大学のようなまねをしようとすると大学があるのだけど高専要りませんよねと、それからあまり資格試験をばんばん取らしていると、専門学校が頑張っているのに高専要りませんよとなってしまいます。

だからよそのまねをしないような独自路線を取らないといけません。

私は5年間鹿児島島の校長をしていて、その間にもいろいろな企画を出さされましたけれども、全て文科省で却下されています。その理由はどちらかに似ているともう駄目なのです。確かに編入学もあまり強調するとみんな大学行くのなら高専要りませんよねということになって、編入学をあまり増やすことは、機構本部も4割程度にとどめておけというような言い方をされます。

私は学生の教育のモチベーションから考えると、5年まで一生懸命勉強をして、最後の卒研も面白い、楽しい、もう少し続けたいと思うのが普通の学生、優秀な学生だろうと、もう嫌だとなると就職したいとなりがちです。みんながそうだとは限りません。そうすると、大学編入学率も低くなると学生がやる気をなくしている学校だ、どんどん増えると5~6割を超えていると確かに異常な気はしますけれども、非常に学生の学習意欲が高ければより今やっていることを続けたいと思う学生が増えてきます。ですから一つの指標として、さっき教務主事が説明したような徐々に進学率は増えていることは本校の良い兆しだと理解をします。

今度、大学から見ると、やはり高校から受験勉強ばかりしてきた学生よりも高専から来た学生は非常に、頭も動くというようなことで、頭でっかちではない、知識だけあるけれども応用力が効かないという学生よりも高専生は喜ばれるので、編入学に関しては非常にどこの大学も熱心に勧誘をします。そういう事情もありますので、じゃあ、高専生はどういう能力をつけたら

産業界で一番望まれるのか、それは大学で求められない、専門学校で求められない、そういうところを求めていただけたら、そういう方向の教育をしっかりとやりますということになるかと思います。

高専の教育で、どこの高専も目指しているのは、課題を見つけて、その課題を解決する力を持っているということですので、大学生も苦手としている専門学校生も苦手になっている、工業高校辺りとは隔するというような人材をいかにつくれたらなということがわれわれの課題であって、先ほどのカリキュラムもそういうことを目指してという思いでいますので、あれは既存の学問体系とはずいぶん変わった複合領域になっていると思います。こういうものを取り掛かるというのは、複合領域は大学もほとんど苦手なはずですし、専門学校はもっと苦手なはずです。だからそれができるのは高専ならではないかということで、多分あれだけのカリキュラムを作っているのは、多分本校がもういの一歩ではなかろうかというぐらいの斬新な考え方で、実際にそれを教育する先生方が大変だと思いますけれども、それでこそ高専教育を受けた学生なのだということが地域で受け入れていただけたらありがたいなという思いでいます。ぜひその辺のことをご理解いただけたらありがたいと思っています。

【野口委員】

私は鹿児島島出身なので、高専のことについては耳にはしていましたけれども、実際こういう機会を得て、いろいろな話を聞いて、本当に勉強になりました。高専について、テクノクラブが100社近くもあるとい

うことは、やはり地元非常に期待されている学校だと思っています。

この3年間の中でも何が大きく変わったのかに関していえば、情報発信がこの3年間で一生懸命取り組んでもらえたのではないかと、先生方をはじめ、学校全体として一生懸命やられてきたのではないかと思います。というのも、3年前私が霧島総局に赴任したときには、やはり情報量が少なかったです。地元に関心を持ってもらえる学校にするには、やはり情報発信というのは不可欠なことじゃないかと以前指摘いたしました。それを実践していただいたということは、地元にも大きな影響があったのではないかと思います。

学科再編について基本的はことを教えていただきたいのですが、これは高専が進められていますけれども、時代のニーズに合った教育ということであれば、他の高専でも取り組んでおられるのではないかと思います。それについてと、現時点ではペンディングという形になっているのかもしれませんが、目標としてはいつぐらいを考えているのかということをお教えいただきたいと思っています。

あと、これは意見になりますが、情報発信の中で、3年近く前になるのですけれども、就職のことで高専さんが取り組んだ、保護者を対象にした企業合同説明会をされたかと思っています。これは私が取材していて非常に大きなことだと思いました。学生自身に説明するということはもちろんですが、保護者にアピールすることの大事さと、先ほども説明の中でありましたように、入学者でも親へのアピールから志願者が増えたということもありましたように、

素晴らしいこともたくさんやっておられるかと思います。そういう部分をアピールしていくことが大事なのではないかなと思います。

それから、この評価委員会のあり方について、先ほどもありましたけれども、長い期間の目標達成みたいな形であるのが、私もよろしいかと思います。そして、いろいろ計画を立ててその達成度を見るというのは、私どもの企業でもやっていますし、そういうことが主流になるかと思います。高い目標を立てて、それに果敢に挑んでいく、そういう意欲的な目標を持つてすることが、大変な苦労はあるかとは思いますが、学生をどう優秀な技術者を育てていくかということに関しては、やはり高い意志を持ってやるのが重要です。地元の報道機関としましては、それが地元貢献につながることで、そういうふう感じています。

【須田副校長（教務主事）】

学科再編の話ですけども、例えば九州内ですと、北九州高専が5年ぐらい前に学科再編をしまして、どういう形かという、大体学科再編をするところはみんなそうですけれども、名目上一つの学科にしてしまいます。高専の場合、設置基準というのがありまして、本校ですと5学科、1クラス40人で200人ですけども、35人のクラスとか、30人のクラスが学級として作れるかという、作れません。ですから、1学科で5クラスにして入学生を入れてしまって、そのあとコースという形でやっています。大牟田にあります有明高専も同じような形ですけども、先行して再編をしているところは、1学科に統合した形にして、

そのあとコースで専門性に従って分ける形になります。

そうしますと、今、本校がやっているのは、少しそれとも違います。大きくりの1類、2類、3類という形に分けて、さらにその先にもっと深い専門があるという形で、これまでの学科再編をした学校とはまた違った考え方で、絵を描いてみたというところでは、

【宮田電子制御工学科長】

保護者向けの企業説明会は、保護者説明会のときに一緒にする形で、保護者の方に見てもらおうような形で進めています。

【須田副校長（教務主事）】

ずっと継続してやっています。確かに、少しアピールが足りないかなというところはありますけど、継続してずっとやっています。

【笹川委員】

私はもうほぼ最後なので、何となく出尽くしてしまった感じもありまして、論点としては重複しているところもありますので、感想めいた意見ということになると思いますけれども、ご容赦ください。

まず、一番初めにご説明いただきました学校概要とか最初に説明していただいた大学編入の割合が4割ぐらいというのは、私は去年も一昨年も出席しているのですけれども、多いなと思ってしまいました。先ほどご説明いただいて、4割はぎりぎりの数字ということで、高くても低くてもということもあって4割程度ということで、上からも言われているということでしたけれども、

私はやはり去年だったか申し上げたと思いますけれども、このような多様な出口がありますということはどんどんアピールしていくべきだと思っています。

もちろん本来は高専を卒業した段階でもう手に職を付けるというか、技術者としてもう完成していますということで世の中に送り出すというのが本来なのかもしれないですけども、やはり今、結局高専に入ってくる子どもというのは、中学校を卒業した子で、親としての立場で考えると、その年齢の子が将来のことをきちんともう、それでも高専を卒業して、技術を得て、こういう職に就くというところまでの覚悟ができていくかと言われると、なかなか難しいのが現状ではないかと思っています。

ですので、よく大学に入ってもやりたいことが違ったと言って、学部変更したり、入り直したりという話も身の回りでもよく聞きますので、そういう意味で考えますと、中学を卒業した子どもが、きちんと将来を考えて道筋を立てた上で高専に行けるかと言われると少し不安があるというお子さんや親御さんも多いと思います。そういう意味では、予備校化するのとは本来ではないと思いますけれども、やはりもっと技術者として自分の知見をもっと高めようと思えば、こういうやり方もあるというところは、もう十分アピールすべきではないかと、私は思いました。

それから、学科の再編に関しては、やはりこれも学生のニーズなのかどうかよく分からないのですけれども、大学も結構昔からの学部を改変して新しい名前の、学部の名前だけ見て何をするのか分からないようなそういう学部を新しく作られるところも

多いと思います。もちろんそれと同じようにということではないのですが、それも多分先ほど私が申し上げたような、大学入る時点、それは高校卒業後ですけども、その時点でもやはりきちんとこれと、集中してここでやっていくのだというところの覚悟がまだできていない子が多いのではないかと思います。ですので、大学でも大学内での転部がしやすいところだったり、きちんと自分の専門を決めるまでに1年、2年余裕があるようなカリキュラムのところに人気集中しているような気がします。そういう意味では、今までのような、専門でばしっと分かれたような形ではなくて、新しくいくつか横に分けるという言い方をしているのか分かりませんが、いろいろな分野をミックスというか合わせたような新しい学科を作って、それが先ほどの話でほかのところは一つにしてしまうところをあえて三つというところは、それはそれなりのというか、こちらの戦略があつてのことだとは思いますが、そういう意味で新しい学科を作られるということには非常に期待をしたいと思っています。

それから、合格が決まって、でも高専への入学を辞退する人というのも何人か毎年いらっしゃるのでしょうか。そこら辺をお聞きしたいのと、その関連で、先ほど鹿児島高専に近いところには都城高専があつて、特に大隅半島は都城に流れがちだというお話もあつたような気がします。そこら辺が、例えば組織上の問題なのか、それとも単なる交通機関とかそういう問題なのか、そこら辺の原因についてはどのように分析されているかというのをお教えいただけたらと思います。以上です。

【丁子校長】

一つは 15 歳で将来をそんなに決められるのかということと、今、学科がある程度狭い範囲でやっていて、融通が利かないのではないかという、同じ問題ではないかと思えます。高専もほかの学校も同じだと思えますけれど、基本的に基礎を学ぶところで、例えば機械工学科に通っていたところで、将来機械工学の仕事をしなくてもいい、あるいはそれ以外でも仕事ができるという能力を付けるところが高専ではないでしょうか。

いわゆる知識ばかりではない。だから先ほどもあまり資格試験にこだわらないようにと言ったのもそういうことで、学校で学んだことで生涯、今、人生 100 年時代やっていけるのかといたら、今の変化の激しい時代、10 年たったら、20 年たったら、全く時代が変わってくる。最初考えていた職業が 10 年後にはなくなるかもしれない。ましてや今、AI ができると、私もはっきり分かりませんがいろいろな職業がなくなります。そういうことを考えると、学生時代に学んでいたことが、実際には 30 代、40 代になったときに、無駄だったなということにならない教育をしているのが、私は高専ではないかと考えます。

だから、先ほども申し上げましたように、技術系の仕事であれば今の社会を良くする、人々が幸せに生活をするためにはどんな技術が必要なのか、そういう課題を見つける、その力を付けさせてやりたいと。それを解決する術も、そういう力も付けさせてやりたいと、そのときには新しく学ばなければ、

いつまでたっても学ばなければ、新しい知識を入れておかなければいけない、そういうやり方を学ぶのが高専だと。最終的には卒業研究もそういうやり方をして、世の中にないものをどうやってやるのだということになります。

はっきり言うと、最近朝ドラで、発明家のドラマがありますけれども、私は、あの方は別に学校を出たわけではない、ドラマの中でははっきりしませんけれども、知識があったわけではありません。一生懸命やって、知識をあとで学びながら世の中にないものを作り出したという方のドラマだと思っています。

だから、5 年間で学べること、知識量はたかが知れています。ただ、新たな知識を取り入れる術を学んでほしい、そのためにしっかりと自主的に学ぶことに取り組めると、そんな人間を人材として世の中に送り出すのが高専の役目であることを考えると、15 歳で考えて高専 5 年間で学んだあと、その力を生かしたところであれば違った世界に行っても私は構わないと思います。その学科も狭かろうと広かろうと、それを学んだことが生涯 100 年続けるわけがないので、そのあととどんどん学んでいけばいいのです。

最近、私はつくづく若い学生に教えてほしいことがたくさんあります。スマホの使い方がもう分からなくなっています。でも、まだ私も人生長いと思っているのですけれども、スマホを使いこなさないと将来どうなるだろうと不安になります。そのときに学ぶ力がないと、駄目なのではないかということを感じています。

ただ、どうしても中学生の段階では、せいぜい数年先のことしかイメージが湧かな

い、中学生の子どもに30年先何をしていますか、答えられるわけがありません。だとすると、学科選びもどうしてもそういうような傾向に、そんなふうに影響されてしまうので、分かりやすい学科、いろいろな授業があるとかも分かりやすく説明して、将来どうなるということを分かりやすく説明しないと応募がありません。先ほどの志願者のへこんだところ、増えたところ、十分に中学生が名前だけで理解しているかどうかは分かりません。

先ほど大学の改組がありますと言いましたけれども、極論かもしれませんが、ほとんどは名前だけ変えたところが多いように思います。カタカナ名ですとばっと学生が集まったとかという話があります。でも中身は大して変わっていないです。なぜ変わらないかという、学問体系がそんなに変わるわけではないので、とんでもなく新しいものができるわけではないので、そうすると、入ってからこんな学科だったのかというような、学問はこんなことする学部だったのかとなってしまいがちなのが現状だと思います。

先ほど、都城の話がありましたけれども、都城高専には結構分かりやすい学科が二つあると私は見えています。化学系の学科と建築系の学科があります。これが非常に分かりやすいので、近くに通える交通機関も便利だということもありますけれども、女子中学生だったら化学系が結構人気があります。どこも女子は半分以上というような学科です。建築系も比較的女子が集まりやすいです。ですから、大隅半島では行きやすいということです。ところが鹿児島はどちらかというと機械とか電気とかそこら辺が

中心で、最近では都市環が、名前が変わって受けがいいので、女子も増えています。それから情報系も女子が多いです。そういうところは比較的倍率が高くなります。学科の説明が十分ではないと言われてしまうと、やはり志願者倍率が減ってきてしまう。志願者倍率が減ったところは大体女子が少ないところになります。

もう一つ、これは裏付けがあるような情報ではないですけれども、最近では保護者の方がいろいろなところで動いています。保護者は大体母親が多いです。ですから子どもの進路決定権を持つのは母親が非常に影響力を持っているということなので、女性受けする学校説明会をやらないと駄目だと、数年前からどこの高専でも言われた始めて、そういう説明の仕方をしないと、いまだに本校は男子校ではないかとはつきりおっしゃる方もいるぐらい、そこら辺は説明不足かなというような感じはしています。

逆に私からもお尋ねしたいのですけれども、笹川委員さんがそういう目線というのはどういう目線なのか教えていただけたらという気持ちでおるのですが、いかがでしょうか。

高専というのはそういうところで、しっかりとどんな分野でも、技術系としか私は考えようがないですし芸術家になるのは無理だと思いますけれども、技術系であればいろいろな分野に応用が効く、一つを通してしっかりと勉強しておくと、別の分野でも応用が効くようなそういう人材育成を高専はしているのではないかと、それは、大学でもほかの学校種でも、恐らくまねのできないところ、あるいはまねのできない学校種にしないといけないと私は思っています。

【須田副校長（教務主事）】

教育に関しては校長から理想的な姿を説明いたしましたけれども、現実の問題として、3分野とかというのは、実は過去の改組をしたところは、大きくくりで、1学科で入ってきて、当然2年生あるいは2年生後半でコース分けをします。そうすると、やはり本校でも入学志願者は今、情報が一番多いですし、どこかの人気コースに志願者が集中します。そうすると、どうしても成績とかで割り振ってしまうので、自分の希望しているところと違うところに割り振られた学生は、モチベーションがものすごく落ちます。そういう情報もいろいろ聞いています。ですから、そこまで全然違うところにどんと回されるよりは、ある程度大きな枠を作っておいたほうが、入ってきてそのあとモチベーションが落ちるということが防げるのではないかとということもあって、あんな形にしているというところでは

また、辞退者についてです。辞退者は、今年1名出ましたけれども、この数年では初めてです。この数年ではうちは第2志望、第3志望まで採りますので、入学学力試験のときに第1志望、しかしそのボーダーに及ばなかったということで、第2志望とか第3志望で合格を受ける学生います。それでもこの数年間、私の記憶している限りでは辞退者はおりません。今年初めて1名出て、やはり志願者が多かったので、公立高校と両方願書を出して、うちに受かってから進学校に行こうかという子が何人いるのではないかと、もしかしたらもっと出るとか危惧していたのですけれども、1名だ

けでした。ですから、そういう面では受験生からも信頼されているところがあると思っています。

それから都城高専は、中学校を訪問していくと、交通の便でしょうか高専というところとかという都城のイメージで、大隅特に鹿屋とかはバスで行けますので、そこは交通の面が大きいと思います。

【新原委員長】

私からいくつか、いろいろ考えて読ませていただいて話していく間に、そこにいろいろ書き込んでみたのですが、ご意見聞きたいとか、こういうことトライしてみたらどうですかというのを羅列していったら、48件出てきました。あとでひょっとしたら先生方のやっておられること、どこかでまたということがあるのかもしれませんが、今日皆さま方の話を聞きながら、ひょっとしたらこういうお話を聞いておいたほうがいいかもしれないなということに限ってご質問・ご意見してみたいと思っています。

一つは、全国に私立まで入れて高専というのは60近くあります。今、それぞれの高専というのは、それぞれにある特徴を持っているようですが、でも機構がするのは統一的な何かをやろうとしていまして、各地域にある特徴というのが消え始めているような気がしてしょうがないです。そういう面で、鹿児島でここにある鹿児島高専のありよう、特徴、ほかの見ない、ほかの高専にない特徴というのは何なのかというのを、どこかで訴えられるような何かがあればいいなと思います。KOSEN4.0で急にカリキュラムの改廃とかありますけど、あれも中に何が入っているかということに対して、

そういうことを考える必要があるかもしれないなと思います。意見なのか分かりませんが、そういうことが非常に気になります。

もう一つは、先生方の意見を聞いて、皆さんの意見を聞いていても、私も非常に苦しんだ時期があるのですが、高専というのは何なのだ、高専制度は何でできて、今後どういう形で発展していくのか。1年間である国には高専を三つつくりました。ある南米の国には、1月に行って9月にはもう学生を募集するぐらいのスピードで高専をつくりました。5年制の教育制度はなかったので、学生を募集したあとに国の教育制度を直してもらったところまでいきました。それと、そういう面で高専というのを素晴らしい評価を外から受けています。ある面ではいろいろなつながりがあって、今、外国に高専という名前の5年制のところというのが七つぐらいできています。その学生というのは1、2年で日本語を完璧に習って、3、4年次は、半年ぐらい日本に派遣されます。そういう意味でグローバルな活動とか何とかというのは、かなり今後変わってくるのではないだろうかというふうな気がします。

それと同時に、もう一つ、そういうことの広報、中学生または両親、先生方、お母さま方にどういうアピールをするかという話ですが、入学生を増やす試みにおいても、そのとき非常に気になっている問題が、基本説明聞いても、ホームページ見ても、学校要覧を見ても、中学生は分かりません。対象は誰なのだと、あれを見たら大学の要覧なのか、高専の要覧なのか分かりません。高専というのは基本的には3年がいわゆる高校生の時代であと2年が短大の時代、あ

の中身というのは、非常に分かりづらい。そういう意味で単純明快に高専の良さというのを、中学生に訴えるための手段というのを考えないといけません。

私、ときどき全国の高専を回らせていただいて、いろいろな話をさせていただくときがありますけれど、そこで使っていたデータで二つだけ紹介させていただきます。今の工学系の技術者で大学卒業というのはほとんどマスター卒になっています。80何パーセントがマスター卒です。そのマスターをどの大学が今までどれぐらい出してきたか、平成3~19年なので、少し古いデータですが、東工大が1万6,000人です。阪大が1万6,000台、京大が1万2,000台、東大も1万2,900です。九大が1万1,000、技大が1万1,000ぐらいです。技大は豊橋と長岡を足していますが、実は両方の大学も8割が高専から入ってくるわけです。だからある意味で高専の学生が全国の7帝大を下に見て、東北大とか名大、北大が下です。だから、日本が非常に大きく伸びたとき、技大で勉強し学んだ子どもたちが、大学を経由していますけれども、非常に活躍していると、それは非常に端的にいろいろなことを言えると思います。

さらに、最近いろいろなデータが出て、昨年12月25日日経新聞に載った、そのあといくつかフォローがありましたけれども、それは何かといいますと、東大のある准教授が調べたデータが載ってまして、東大工学部の上位30人は、卒業時の成績というのは卒研も含めて、大学院だったら修論も含めてですが、上位30パーセントのほぼ全員が高専卒だということです。そのデータが出たときに、東工大もそうだというのです。

私はそれはある程度実感していて、長岡技大の学長になったときです。6年間で東大を抜いて世の中が期待する大学像といったら東大を抜いてトップですって。そうしたら、現実に日経新聞が10万社にアンケートを採ったら、そのときに学長で最後の年でしたが東大をやっと抜いてトップになりました。グローバルな意味では今は13位になっていると思います。その中の8割は高専じゃないですか。だから高専というのは素晴らしい教育をしているということがいえます。

いろいろな人たちに話を聞きますと、一般高校を減らしてもいいから高専をもっと増やせとおっしゃいます。ところが機構とかいろいろなことがあるので、先ほどから何かあります。大学にもない高校でもないような特殊な地位を見つけるという話があったような気がしますけれども、なかなか難しい問題だと私も思っています。

私は学長を辞めるときに文科省と機構に行って180ページのペーパーを出しています。それが「高専・技科大学を含んだ未来像」といいます。これは全ての高専と全ての技大、それで海外の高専も一緒になって世界にまたがる大学構想を立てると、そうすると、空間てきには世界一になります。それから学生数、先生の数、研究員含めてこれも世界トップです。活躍度もトップになります。そうすると必然的にいろいろなものが集まってくるはずです。そういう大きな構想というのが、せつかく束ねて機構ができたのだからという話をします。

その中で大事なものは、各高専がどんな役割を担うかということが非常に重要であるような気がします。特に先ほどから言いま

した鹿児島高専というのは、特徴がほとんどなくなっている、思ったよりもないです。先ほど高専は非常に素晴らしいという話をしていますと、その中で鹿児島高専もこういう役割を担っているのだよということを、非常に端的にお父さま、お母さま、学生、先生方に、社会に分かるように訴える何か、求めたら必ず出てくるのではないかと思います。

そうすると、先ほど同窓会の話、データが卒業してから取れるみたいな話がありますけれども、ある面では全ての高専を束ねて、高専機構あるわけですから、それを一つにした大同窓会組織体をつくって、それを会社組織にしていればいいです。それは例えば早稲田も慶應も全部やっています。それより大きい組織体になるわけです。できないわけがないとは思っています。意見かどうか分かりませんが、やりようが結構あるという気がします。

それと、そういう面で、もう1回高専というのは何だということを正しく理解し、どういう形で訴えるかということ、ここだけの問題では私はないと思います。どこかで本質的に1回意見、審議してもらってというような気がしないでもないです。

それともう一つ非常に大事です。高専の良さは何かということです。私の意見ですが、学生と先生方が非常に近いです。15歳という多感な時期から5年間だったら20歳になるまでずっと朝晩いる、しかも寮に入っている場合が多い。だから学生同士の連携もできあがります。寮制度も含めて高専の良さという一番は先生方です。高専から来た学生と付き合っているいろいろ相談に乗るのですが、社会へ行っているいろいろな困る

ことがたくさん出てくるのですが、そうすると、一番先に相談に行くのは高専の先生なのです。最終的に従うのは高専の先生の意見に従います。大学の先生ではないのです。というのは、その多感な15歳からの一番大事な、一生を決めるようなところを先生方は握られているわけです。その影響力というのはすごいものだと思います。だから、今の高専は何をするべきか、どうするべきか、教えるべきか、ということも、15歳から5年後の20歳までの重要な時期を高専側は持っているという、そういう意味ではあまりぐらぐらしても駄目だし、ましてや基礎の基礎の基礎を徹底的に教えることが非常に大切なような気がします。

KOSEN4.0 というのもロボティクスがいろいろあってバイオとか出てきますが、それはそれで私はいいと思います。今後の方針も見えていいと思いますけども、それが逆に必要な基礎の基礎のところは欠落するようなことにつながるのには困るのではないかと、そんなことを聞きながら考えていました。

質問なのか意見なのかよく分からなくなったのですが、いずれにしても、非常に大事なものは、その中でそういう活躍をしてもらおうとすると、これは資料に入っていなかったのですが、管理運営の面で、働き方改革ですか、時間をどうつくるか、どのぐらい予算を生かすかなどというのが出てきますが、一番大事なものは先生方が教育に割ける、研究に割ける時間をどうやってつけてあげられるかです。

というのは、大学のデータで、高専に当てはまるかどうかは分かりませんが、高専はもっとひどいことになっているかもしれま

せんが、13～18年の文科省が取ったデータがあります。それを見ますと、大学の先生は教育に割く時間が13パーセント減ったというアンケートデータです。高専はもっと減っているのではないかと考えています。いろいろなことをやらざるを得なくなっています。だから一番大事なところが高専から失われている可能性があるような気がして、そここのところは何らかの方向で守っていくような対策を練っていただければいいのかなと。質問なのか意見なのかよく分かりませんが、もしなにか反論でもいいから答えがありましたらよろしくお願いします。

【丁子校長】

高専の先生方の業務というのは、先ほど働き方改革の質問もございましたが、だんだん増えているといいですか、逆に超勤手当をなるべくつけないように、しっかりと就業時間内に仕事を終わらせてくださいみたいなところもありますし、そういう意味では勤務時間というのは、実際にはかなり限定されてきつつあります。だからこそ業務をなるべく簡潔にして本来の学生指導に、これも教員と学生との関係が近いというのも時間をたっぷり使っているから近くなるわけですけども、それを真面目に取り組むと本当に時間がなくなっているのもあります。それでも一番大事なところは何かということを考えて、そこを重点的に取り組むということかなと思います。

まだどこの高専も、私どもも具体的に答えを持っているわけではありませんけれども、高専の良さは確かにそこら辺であるに違いないと思います。できるだけ学生の指

導を密にして効果的にできるような工夫を、これは各全教員が少しずつ工夫しながらそういう時間をひねり出しながら、かといって働き方改革に違反しないように、それぞれの生活も大事にしながらということを取り組んでいかないといけないと思いますけれども、これは今後の課題ということで、返答に代えさせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

【新原委員長】

ありがとうございます。

これから時間をいただいて、別室で委員だけでいろいろな相談をさせていただければと思いますので、よろしくお願いします。

先生方、ありがとうございました。

※当日配布資料に関する質問はあがらなかった。

8. 外部評価委員会講評 及び本校の対応

～外部評価委員会講評～

①鹿児島高専が目指すべき方向について

1 点目は、これは前回も同じだったと思いますけれども、鹿児島高専が目指すべき方向は何なのだと、これは機構との兼ね合いがあるので、どうなっているのか、機構の方針があってその中で鹿児島高専というのはやはり何かあるのだろうと私は思うのですが、それを方向がこれでそれに対してこういう取り組みをして、結果がどうなったというのが見えないと、なかなか評価しづらいです。いろいろなやり方、考え方があると思います。

②教育改革について

2 点目について、鹿児島高専、いろいろな改革、教育改革はいいことですね。教育改革で三つの方向性というのがありましたし、それは素晴らしいなと印象があります。その中でやはり鹿児島高専らしさ、鹿児島高専だからというのがどこかにやはり欲しいと思います。私自身はグローバルに考えたらうんうんと思います。でも、地域に根差す高専、地域のために役立つというのが、つくられた経緯でもあります。それから KTC に入っている企業はこの近辺の企業がたくさん入っていて、地域というのがすごく見えますが、そうするとその人たちも、何で鹿児島にあるのか、何でこれを支援しなければいけないのかとか、例えば金銭的

に困った学生がいたら、公的な奨学金だけじゃなくてそこから集めてできるような新しい組織体を作ろうかというような機会が生まれるのだったら、鹿児島高専がここにある理由というのが、どこかで明確に書けたらいいと思います。やはりなにか理由を述べていただいたほうがいいのではないかと思います。

③広報について

3 点目は、ホームページを見ても、何を見ても、あれは中学生には分かりません。中学生のお母さんにも分かりません。多分、中学校の先生は、技術の先生だったら分かるかもしれないけれど、ほかは分かりません。下手をするとこの地域の関係者も分からない可能性があります。ホームページ全部をとるわけにはいきませんので、少なくともそここのところは、中学生が見たら高専とは何だとか、高専行ったときどういう活躍できるかとか、そういう形に変えることはそんなに難しい話ではないのではないかと思います。

【丁子校長】

ありがとうございました。委員の方々には本当に長時間にわたりいろいろと評価をいただき、期待どおりに厳しいご意見いただきありがとうございます。半年後に HP 作成、宿題ですので取り組んで、来年度の志願者倍率に効果のあるわかりやすいものにしていきたいと思います。HP に関してはもうちょっと努力が足りないかなと思っておりましたが、今のご指摘をいただいて

さらに拍車をかけてしっかりとしたものを
作りたいと思います。

またぜひご指導いただけたらと思います
ので、今後とも外部評価委員会に限らず、
ご意見お寄せいただけたらありがたいと思
っております。本日は本当にありがとうござ
いました。

